

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和十七年七月廿日印刷納本・昭和十七年八月一日發行

第八卷 第八號

淨

土

をする

いてゐます。即ち

月

あけて字解まで

してゐます

號

教書

かを

運動を



中村辨康著

日常勤行式講讀

信仰の入門書！

座右に備へて日常

勤行の深意を味得

し、以て各自の修養に最適です！

毎日お勤めをするお經文の一々に懇切

な解説がついてゐます。即ちお經文に

和譯と意譯をあげて字解までつけ信仰

の深底を縷々述べられてゐます。

誰にでもよく判る佛教書！

一讀して信仰の何たるかを解

し得る絶好の書です。

B 6 版二百四十頁
價 一圓五十錢
送料 十二錢

山本幹夫著

法然佛教とわが國體思想

わが國體思想からみた

法然佛教の新しい基礎づけ

神國日本の教法として開創された

法然佛教を歴史的に解明した時局

下必讀の書！

日本佛教の發展が法然佛教に到つ

て初めて萬民翼賛の教法として現

れ大成されるまでを總ゆる資料に

より解明されてゐる。

わが國ならではと思はしめる新宗

の開創の源

を説いて餘り

なし。

A 5 型クロース装
價 二圓二十錢
送料 十五錢

振替東京芝区公明會館
番七八一二八

法然上人讚仰會

發行所

淨土八月號 目次

表紙・扉……………河村良孝 目次・カット……………大羽比羅夫

淨土宗の勤皇僧……………友松圓諦……………(四)

岩井智海猊下の思ひ出……………眞野正順……………(六)

菽 咲……………吉田絃二郎……………(三)

聖典講義 世界を動かす力……………大野法道……………(六)

雅 樂……………話……………多……………忠朝……………(八)

婦 道……………清……………明……………江上秀靜……………(三)

これは便利……………(兜)
お光と罪人……………(三)
おつ……………(三)
會のたより……………(三)
水泳の注意……………(五)

繩 跳……………運動の指導……………出口林次郎……………(四)

淨土隣組座談會……………編輯……………部……………(三)

▼信……………仰……………相……………談……………中村辨康……………(四)

創作茄……………子……………畠……………碑……………徹雄……………(五)

歌俳……………壇……………岩野喜久代選……………(三)
俳壇……………太田耳動子選……………(三)
淨土漫畫 掃海艇……………漫畫協團……………(四)
歌壇選者の言葉……………(三)

法語解説 阿彌陀佛に依てのみ完し……………中村辨康……………(五)

編輯……………後……………記……………(五)



淨 土 八 月 號

念佛の行を信ぜぬ人にあひて
論じ、又あらぬ行の人々にむ
かひて執論候べからず。

法然上人御法語



淨土宗の勤皇僧

友松圓諦

淨土宗といへば

「淨土宗」といへば、誰しも、徳川家を思ひ出すほど幕府方にきつても切れぬ因縁があつたのである。だから、その時代の事情をふかくも考へない人たちは、淨土宗といへば幕府方であると、ひとりぎめをしてゐる。もちろん、さういふところは充分にはあるが、さう一概にものをきめてかゝるといふことは危険なことである。幕府方に佐幕派の人ばかりとはかぎらず、徳川の祿を貰つてゐながらも心中ふかく勤皇の精神をいだいてゐたものもある。このごろ、矢吹博士と法縁のあつた琳瑯といふ勤皇僧のことをやかましく言つてゐるが、この人などは、どうも「佐幕勤皇」の一陣營の中心人物であつたやうである。この琳瑯といふのは行誡上人のあとをうけて小石川傳通院山内、處淨律院に

住持をしてゐたのが、慶應三年、つまり明治元年の前年、十月十八日に今日傳通院のうら、光圓寺のうへ、三百坂といふところで高橋泥舟のところからの歸途暗殺されてゐる。たしか、三十八歳位であつたらうか、行誡上人とは非常に法縁のつよい人で、暗殺されたとき、そのあと始末は上人がみんなやつてゐられるところから見ても、一分、行誡上人も勤皇の一味ではなかつたかと思ふ。ある明治初期の書物などには行誡は勤王者であるとはつきり書いてゐるほどである。それにはいろいろの點が注意されるのである。

傳通院を中心に

第一、どういふわけか、小石川傳通院なり、あの界隈といふものが佐幕勤皇の中心地であつたらしい。山岡鐵舟、高橋泥舟がすぐ一つ谷をこえて近所に住んで



ゐたためであらうか、それとも、行誡なり、琳瑞なり
 の住地、處淨院といふ律院が勤皇關係の人々の出入り
 したところらしいからそんなことになつたのか、この
 點は尙、これから充分研究してみることがある。今で
 も傳通院の中には勤皇運動の始唱者といはれてゐる庄
 内の人、清河八郎夫妻の墓地があるが、この清河八郎
 が麻布一の橋で殺されたとき、山岡鐵舟たちの肝入り
 でその遺骸は琳瑞が世話をしてゐる。この清河八郎の
 遺墨も琳瑞の手許に残つてゐるほどで、生前、交通が
 あつたにちがひない。それに注意すべきことはお玉が
 池の東條一堂といふ儒者は行誡上人の結縁録の中にも
 「おのれが外典の師は此外になし、著述若干、門人多
 し」とある通り、行誡上人の師匠であるばかりでなく
 琳瑞、清河八郎も同門の弟子である。濫澤榮一など、
 北武藏で勤王運動をやつた桃井可堂なども同門であり
 この可堂なども自分の妻女が死んだときには琳瑞にた
 のんでゐる。たしか、今日、傳通院の墓地にあるわけ
 である。

琳 瑞 和 上

なぜ琳瑞が殺されたらうか、そしてなぜ行誡上人が
 これら萬事總便にすましてしまはれたらうか、これに
 ついてはどうもはつきりしてゐない。琳瑞は小石川の
 泥舟のところへ出かけて夜おそくまで激論をしてゐた
 といひ、暗殺した下手人も泥舟の弟子であるところか
 ら考へていろいろ風説を立てるものがあつたやうだが
 私の目下見當をつけてゐるところでは、一口に「佐幕
 勤王」といつたところでこれがまたいろいろで、「討幕
 勤王」に傾いてゐたものもあつたにちがひない。清河
 八郎が文久三年三月十三日に幕府方のものに暗殺され
 たのも「佐幕」の色合がうすくなり、「尊王」の色の方
 がつよくあらはれ出した爲めであつたとすると、琳瑞
 も青年血氣にまかせて同一方向に色が濃くなつてきた
 のではあるまいかと思つてゐる。海防、攘夷の熱がた
 かくなつてきて、表面上、傳通院に住んでゐる以上、
 佐幕の體面を保ちながら、本心では追々と討幕までは
 ゆかずとも「反幕勤皇」に傾きかけてゐたのではない
 かと思はれる。この點は目下、京都佛專の校長石橋誠
 道先生が細密に調査中であるから近くその結果がうか
 がへると思つてゐる。矢吹先生が生前、琳瑞傳を苦心



してまとめて下さつたので、仕上げをして下さつてゐる石橋先生と列名で立派な「琳瑯傳」の世に公けにされるのもあまり遠いことではあるまい。

巖 考 と 梅 痴

千住の同向院は兩國の支配下にあつた出張所であるが、勤皇の志士が小塚原でいたましくも刑殺されたとき、そこに留守居した僧巖考はこれら殉國の英靈をねんごろに世話をしたかどで五十日の閉門を仰せつけられてゐることも忘れてはならない。川口巖考の手に加つた數多い勤王者の中で、有名な勤皇僧、清水寺の信海阿闍梨もその一人である。信海は西郷隆盛と入海した月照の實弟である。この信海や頼三樹三郎などの死骸をひそかに弔ひまつたのである。この位のことには慈悲心につよい僧分として、今日から考へると何でもないことのやうにきこえるが、幕府側にとつては謀叛人である志士のことだから、たとへ出家の分際としてもその面倒をみることは大の禁物である。多くの僧尼はわざと見て見ぬふりをしてゐたのである。巖考がそのためにきびしいお咎めをうけたのも無理がない。彼

は美濃の生れで岐山と號し、留守僧とはいへ仲々の學徳をそなへたものであつたらしく、天保年間このかた六十年もこゝに住んで刑囚を葬ること五六萬人に及んだといつてゐる。明治廿九年三月廿九日に八十二歳をもつて歿してゐる。彼が勤王の志に厚かつたことは志士の間にひろく知られてゐたやうである。巖考のことは今日長壽を保たれてゐる人々の間には尙記憶に残つてゐるであらう。少し詳細のことを教へて貰ひたいと思つてゐる。江戸を中心に氣骨のある勤皇僧はまだだゐたらうと思ふ。梅痴上人なども梁川星巖門下の一人に數へられてゐるほどの詩人であつたから、この關東の政治的重壓をうけながらも若干尊王の心もあつたらうと思はれる。養蠶徹底上人は海防論まではゆかずとも、元來、邪教洋法を反撃した第一人者であつたから攘夷の陣營には近い人であらうと思はれる。もちろん、岩槻の淨國寺といふ幕府直系の檀林にゐたために、千代田城にも招かれてその時事の識見を徴されたのみならず、わざわざ、京師に入り太政官のために徳川を辯護した記録がある。尊王勤皇まではゆかなかつたが慨世の一人ではある。晩年若山にゐた普門律師



は梵曆をふりかざして護法愛國の大活動をしたが具體的に王事につくすといふまでには行つてゐない。山形の畫僧圓潭にも勤皇の志向があつたといはれてゐるが、これももつと調査してみたい。和歌國學方面から人物ではさきにのべた行誠、神奈川三寶寺にゐた辨玉、洲門上人とも往復のあつた岐阜の光阿、京都の拜郷連菌などは注意すべき人物であらう。

京都の勤皇僧たち

昭和十三年に佛教專門學校から「勤皇運動」の特輯號が出たことがある。惠谷隆戒氏は普門律師が天朝を尊び奉つた事蹟をのべ、藤原弘道氏は「勤皇歌人大田垣運月」を紹介してゐる。蓮月尼は知恩院門主について、出家をし山内の眞葛庵に父西心と共に住んだ。積極的な王事につくしはしなかつたが九州の野村望東尼と並んで志士のように避難所を提供し、王政復古の到來を切願してゐた女性である。三樹三郎、星巖、天章など、深く往復してゐたのである。尙この二人のほかに「摩訶衍」の特輯號には石橋誠道氏は「勤皇僧神阿和尚の傳」佐藤密雄氏は琳瑞、護明、榮天、秀瑞、空圓、

徳禪尼のことにひろく及んでゐる。かうした多くの勤皇僧については目下それぞれ執筆の擔當學者が苦心してゐられるので近くあはせて「淨土宗明治勤皇僧傳」として上梓されることであらう。勤皇運動は何といつても京都が中心であり、西國の雄藩が原動力である。もとより、三河に生れ性源寺の弟子であつた賢亮は後年、南信に於て平田流の勤王運動の第一線に立つたやうな例外もあるけれども、何といつても京都は勤皇運動のおひざもとである。黒谷空圓の記録をよんでみると八田知紀、大田垣蓮月尼などの勤皇者との交通がはつきりわかる。伊達千廣などは殊の外の親近である。畫僧光淳が幽囚の身となつて江戸に護送されたといふ傳説もある位で、今後、宗門人の總力をあつめたら、まだまだ幾人も勤皇僧が発見されることであらう。とりわけ、九州中國に寺院の多數をもつてゐる淨土宗のことである。必ずや、防長二州をはじめ、九州一圓の勤皇藩に數多い宗門勤王僧が尙今日世間に知られず地下にひそんでゐるであらう。私はこのさうやかな一文がさうしたうづもれた忠僧義僧を再び白日のもとにはこび出す佳縁となれかしと念じてゐる。



雅樂の話

宮内省式部職樂部樂長

多 忠 朝

京都東山に住んでゐた聖心上人が書見につかれた目をふと庭先に向けた。強い陽ざしがやうやくかげつてサワサワと吹く風に梢が何かさうやくやうに聞えるのであつた。丁度その時どこからともなく美しい樂の音が聞えてきた。笙と笛と箏と琵琶とそれに鼓が混つて、まるで空のかなたから聞えるやうに思はれた。上人は「はて、普通の樂にもないやうな、本當に美しい珍しい曲ぢやが……」と不思議に思ひ、その樂の音に誘はれたやうに讀みさしの本をそのまゝにして庵室を出て樂のする方に歩を進めて行つた。

何の位歩いたか、かなり來てしまつた。そ

の時上人はアト一軒の屋敷に目が止つた。その屋敷の中ではまさに子供が生れるといふので大騒ぎであつた。その内に安産であつたのであらう。元氣のよい呟々の聲が外に立つてゐる上人にまで聞えてきた。すると今まで聞えてゐた美しい樂の音が子供の誕生を合圖にビタリ止んでしまつた。

それから七日が経つた。聖心上人は再びその屋敷まできて、自分が聞いた瑞相を告げたのであつた。その屋敷でその時生れた子供が生長し、後に秀でた管絃者であると云はれた博雅卿であつたのである。この管絃者博雅卿に二人の子息があつて、一人は笛の上手な信

義、他の一人は琵琶の上手な信明であつた。ある時のこと式部卿宮が當時の管絃者伶人等をつれて河陽の川で遊んだことがあつた。その日は、明月ではあつたが、しかし川面には霧が一面にたちこめて、なんとなく幽雅なしづかな感じの夜であつた。すると、たちこめた霧の遙か遠くから「雙調の曲」が聞えて來た。その笛の音はなんとも言へぬ位神妙で姿こそ見えないが、その吹手の乗つてゐるらしい舟が次第々々に近づいてくるのが美しい笛の音の段々と近づいてはつきりして來るののでわかつた。

「我が朝廷にも比べる樂人がない位、上手なものだ。いつたい誰だらう……」と宮様が考へてみたがそれらしい人の名が浮んでこなかつた。舟がまだ霧の中に入り込んでゐてよく見えずつ次第に艘の音だけが大きく聞えてきた。その内に今にもこちらの舟と行き違はうとした。その時親王様は一驚大きく「どなたか？」とお問ひになつた。すると向ふの舟からはただ「信義」と聲がただけで行きすぎ

てしまつた。宮様は感情に堪へず、それ以後は信義のことを「雙調の君」と名づけられたさうである。

× × ×

樂人に助元といふ人があつた。助元は笛をとつては名人であつたが、氣が向かないと

何もしないといふ悪いくせのある人であつた。ある時のこと、役目を怠けたといふので、とうとう左近府の下倉にとぢ込められてしまつた。

この下倉には、大蛇が住んでゐるといふ恐ろしい所であつた。

晝間の内は何事もなかつたが、夜も更けて丑滿時になると案の定怪物が現はれた。頭は獅子の如く、眼はまるで金のまりの様に大きくギラ／＼と輝かした大蛇が三尺位の舌を出し大きな口をあけて、今にも助元をひと口に呑まうとする様子。助元は

まつたく膽を冷し、もうこれが最後と、思ひ切つて腰にさしてゐた笛をぬき出して、還城



樂の破」といふ曲を觀念の眼を閉ぢながら吹き出した。すると、大蛇はのたりのたりとすぐ助元のそば迄きて、頭をたくもち上げてゐた。助元を呑むといふより彼の笛を聞いてゐる様子であつた。さすがの怪物も名人の笛を聞く内に何う思つたか、そろそろとどこか

へ去つてしまつた。危い所で助つた助元は、すでに大蛇の居なくなつたのも知らずに、一心に笛をふき續けてゐるのであつた。

× × ×

博雅三位の家にある夜のこと泥棒が入つた。博雅はそれと知つて大急ぎで物かけへ隠れてしまつた。暫くの間あちらこちらでガタゴト音がしてゐた。その内に泥棒も出て行つた様子なので彼がはひ出して見れば、なんとまた家中の金目のもの残らず盗つて行かれてしまつてゐたのである。がつかりした彼がフト佛壇をみると、不思議にも簞笥が一管とり忘れられてゐる。三位はそれと手にとつて吹き始めた。

一方泥棒の方は重い荷物を背に逃げてゆき、もうこの邊なら大丈夫と一息入れた。すると、いまきた方から美しい樂の音が聞えてきた。思はず泥棒はその音に聞き惚れてゐたものの、遂に感情おさへ難くなつてきて再び博雅の家に引きつけられるやうにもどつて來た。そして泥棒は三位のゐる部屋に入つて彼に云ふには「只今の簞笥の音をお聞きして、何んとも云へぬ美しい音に、私の悪心は改まりました。お許し下さい。」

と前に盗んでいつたものの全部を置いて出て行つたのであつた。

x x x

志賀僧正は生れつき簞築といふものが大嫌であつた。その僧正がある月の冴えわたつた夜、湖上に數隻の舟を浮かべて、樂人歌人等と遊んだことがあつた。はじめ舟にのる時、間がわるく志賀僧正と同じ舟に、簞築吹きで知られた用枝が乗り合せる様になつてしまつた。志賀僧正は

「簞築は大嫌ひだ。用枝は乗つてはいけないぞ若し乗るなら吹かないで太鼓の様な打物位にしなけりや……」

といふと、用枝は「では絶対に吹きません。仰せの通りにしませう。」

といつてから乗つたものである。ところが時がすぎ夜も更けて來た頃人に氣づかぬ様ひそかにふところから簞築をぬき出し、その舌(吹口の音のする所)を湖水の水に浸して濡

りを與へてゐた。この様子を他の同船の人々が怪しんできけば、

「いや、一寸手を洗つてゐるのです。」

と事もなげにすましてゐた。そして更にしばらくすると突然、用枝が簞築を吹き始めてしまつた。人々が「だから言はない事ぢやない、いやな人を乗せてしまつたものだ。せつかくの興がさめてしまふ」といつた。ところがその用枝の吹く音は、音色から曲から實によく、妙味があり身にしみてよかつた。それを聞いてゐる内に人々の目には涙が浮んできてゐた。志賀僧正はといふとほかの人達より

以上に涙を流して、

「正教に、簞築は伽陵頻迦の聲をまなぶと書いてあるが、自分にはわからなかつた。残念な事だつた。これで初めてどういふものかよくわかつた。今夜用枝のしてくれた事は實に有難い。」

と感じ入つてしまつた。僧正はこの事を後々までも、ことある毎に人々に話してゐたものであつた。

x x x

簞築師の用光が船で南海道を渡つてゐた時運悪く海賊に捕へられてしまつた。彼の周囲には、抜刀した海賊共が取巻いた。用光は覺悟をきめて海賊等に向つて言つた。

「自分は永い間、簞築師として朝廷にお仕へ申し上げてゐて、世間にも認められてゐたのだが、今不運にも、お前たち海賊の爲に殺されなければならぬ。これも前世の因縁とあきらめるが、その前に一寸頼みがあるがきいてはくれまいか」

「なんだ、早く云へ、どうせ今すぐ息の根をとめてやるんだ。なんでも言ひたい事を言へ。頼みとはなんだ。」

「此の世の名残に一曲だけ樂を吹きたい。」
「なんだ仕様がな。少しなら待つてやる。早く吹け。」

と言つて海賊共は、用光を取り巻いたまゝ、おれつたさうにしてゐた。用光はもう此の世の別れ、これが最後とばかり肚をするおもむ

ろに簫樂を吹き始めた。その曲は、ハ臨調子りんてうしといふのだつた。名人めいじんが此の世の別れと、思ひきり心を込めて吹く簫樂の澄み切つた音は、あたりに響きわたり、何にもわからない海賊も、一人から二人三人とその樂の音に耳を傾けてゐた。

用光もちみつの顔はいつしか晴々となり、す刻の後彼等に殺されることさへ忘れたかの様に魂を打ち込んで樂しさに吹いてゐた。そのまわりを取り巻く海賊達は、抜いた刀をぶらさげたまゝ夢みる如くたゞ呆然と聞き入り、そのうちに感涙にむせぶ者も次第に出て來たのである。

吹き終つた用光は、靜かに周りをみると海

笑話 小僧さん入用

隣りの家で「小僧さん三名、急ぎ入用！」と書いた札を表にはつておいたのですが、何ういふわけかこの札が毎晩盗まれてしまふのでした。幾度書いても駄目なので隣の主人はたうとう怒つてしまひ厚板に同じ文句を書いて五寸釘で打ちつけてから、「これなら三、四年はもつだらう」と云ひました。

賊どもが涙を流してゐた。海賊は彼の樂を聞いて改心してゐた。用光は彼等に殺されるどころか反つて彼等に淡路の南浦まで送らせたのであつた。

× × ×

終りに一言お詫びをします。雅樂の話ががくをいろいろお話する考へてゐましたが、要務多忙と病氣のためお約束が果せなかつたことを讀者諸賢にお詫び致します。健康回復を待つて更めて續稿を書きたいと思ひます。

ついでには斯道のため誠ににお目出度いことを付け加へておきます。先頃新聞紙上で、時局下に於いて佛教各宗の合同に關連し統一的佛教音樂の確立と云ふことが目標となつた研究會の様なものが誕生されたのを知りました。これは誠に結構なことでありまして大東亞建設完遂途上に重大なる役割を持つものと信じて疑はれぬ誠に國家的にお目出度い御事業と存じますので私は衷心から同會の誕生を慶祝するものであります。

又同時に佛教音樂は雅樂を基本として建設せらるゝ事を祈つて止まぬのであります。なぜなれば宗教と音樂の關連は西洋も東洋も歴史と理論との上に於いてはさらに異なる點はないのであります。西洋人の宗教觀と音樂觀は東洋人の宗教觀と音樂觀に自然に相違がある様に思はれます。然して明治維新以來昭和十六年十二月七日までの日本人の宗教觀、音樂觀は西洋人のそれと格別の大差はなくなつて居つたのでありませうが、十二月八日以來は國粹性格に立ち歸つたお互ひの觀念は自然に西洋人とは格大の相違を見ることになつたと信ずるのであります。従つて佛教音樂の上にも今日では考へ方の相違を見ることは當然のことであると考へます。要するに大東亞建設に伴ふ佛教音樂は東洋を原則として考へられねばならぬと信じます。同時に雅樂を除外することなく寧ろ基本圈内に加へて確固たる佛教音樂の建設を祈つて止まぬ次第であります。休講に際し一言所懐を述べて暫時御不沙汰させて頂きます。



萩 咲 け り

吉田 絃 二郎

今年もまた迎火を焚くところになつた。

聖戦に身をさしげた尊い勇士たちの魂も亦その父の母、その妻子たちに迎へられて故郷の懐かしい家へ家に還ることであらう。

日本の歴史始まつて以來の大戦争であり、國民的感謝はそれ等の勇士たちの家にさしげられたであらう。

迎火を焚くところになれば昔のことが思ひ出さるゝ。

最初は妻と二人でわたくしの父と母のために迎火を焚いた。その二年後には妻と二人で妻の母のために迎火を焚いた。その後十餘年孟蘭盆が來るごとに妻と二人で迎火を焚いたが、今はわたくし一人で父母や姑や妻のために迎火を焚く身となつた。この後幾度迎火を焚くことができるだらうか。

子に先立たれた人、夫に先立たれた人々の心を推察

することもできる。お互に生きて、一年でも長く迎火を焚いてあげなければならぬ。

わたくしの母は、わたくしの兄が幼くして死んだ日から四十幾年の間、ほとんど門外に一步も出なかつた。そしてその愛子と同じ月、同じ日に世を去つた。わたくしは子を失つた母親の悲しみといふものを、しみじみとわたくしの母に見出した。恐らくわたくしの母は四十幾年の間一刹那も亡くなつた子を忘れ得なかつたであらう。

わたくしは母に死別した時、もし年月が経つにつれて、母の倅が薄くなるやうなことがあつたら何うしよう、不安に思つたことがあつた。母は寫眞が嫌ひで、ほとんど寫眞を撮らなかつたので。

しかしこの不安は杞憂に過ぎなかつたやうだ。母が



亡くなつてから二十餘年になるが、母のやさしい眼も聲もさながらにわたくしの胸に生きてゐる。母も恐らく四十餘年前に亡くなつた愛子の俤をそのまゝ胸に抱いて眠つて行つたことであらう。

×

或る醫師の令息は京都の或る醫大の學生であつた。學校ではいつも運動の選手であつた。しかもこの春わづか二日の病ひで亡くなつてしまつた。

また或る醫博の令嬢は一人娘であり、掌中の珠として育てられ、この春東京の女子大を卒業して故郷に歸つたばかりで、白玉樓中の人となつた。両親の悲歎はいふも愚かである。子に先立たれた夫妻は交る交る愛子の寢床に寝てをられるといふ話を聞いた。

愛子に先立たれた親たちが、どんな悲しみを抱いて今年の迎火を焚くであらうかといふことは、子を失つた人でなくては想像できないことである。それに付ても考へられることは死といふ問題である。

八人の子を持つた人があつた。五人の男の子はいづれも秀才で、大學を銀時計で卒業した。しかし七人までは夭折してしまつた。最後に残る一人は妻を貰ひ、

孫も生まれた。けれどもこの親子三人は先年屋島丸の沈没の厄に遭うて歿なつてしまつた。残された老夫婦に對してわたくしたちは、死の問題をいかに説くべきであるか。

數年前淺間山で數人の若い人たちが雪崩に打たれて死んだことがあつた。その中には姉妹の女も交つてゐた。雪が解けてからである。姉妹の娘を失つた老夫婦はせめて娘が歩いた山でも見たいといふ親心から淺間の麓に辿りついた。

姉妹の娘はかつて生きてゐる間日本アルプスの山々を跋渉した。遺された父と母はせめて、娘たちの登つた山々を巡つて、今は亡き娘たちを偲ばんものと、老の身をはげましつゝ父親は穂高にも鎭にも立山にも登つたといふことである。その間、母親は山の麓に待つてゐるといふことである。この老夫婦にとつてはこれより他に自らを慰め、自らを生かしてゆく途はなかつたであらう。

このやうな人々に對してどのやうな慰めの言葉をあたへようとしても、それはたいいてい附け焼刃に過ぎない。たゞわたくしたちとしては默然として悲しむのみ



である。

生死の問題は理論では解決はできない。眞に死んだ人でなくては死の世界はわからない。たゞこれだけのことはいへる。人間の死は肉體の死である。物理的、生物学的なもののみの死であつて、魂の死ではない。山を歩いてゐる老父はその愛娘の姿を見ることができな。しかしかれは恐らく愛娘の魂を感じつゝあるであらう。たゞ人間の肉體的存在は、肉體的存在の妻を思ひ、子を慕ふ。そこに遺された者の悲しみがある。わたくしたちはたゞ同情の涙をもつてかれ等の悲しみを分つのみである。

昨日の新聞には、若くして妻に死なれ、三人の男の子を、男手一つで育て上げた老人のことが書いてあつた。三人の子は三人とも戦線の勇士として召され、六十歳の老父たゞ一人、山田を守つて昨年八十俵からの收穫をあげたといふことである。かういふ人々の生活こそ生死を越えた生活であつて、たゞ頭の下る思ひがする。苦しんでも悲しんでも、早晩静かな死はわたくしたちを待つてゐる。生きてゐる間に働けるだけ働き、耐へられるだけ苦しみと悲しみに耐へてゐたら、

死に面してもさほど驚くこともないであらう。無念論死は寂しい。しかし比較的、静かな心で彼岸の涅槃に禪定の舟を行くことができるであらう。

熊谷直實が法然上人を頼つて佛門に走つた原因を領地の訴へに歸せしめて考へてゐる人もある。これは芝居としては面白いが、直實は人間生死の問題が主であり、すべてであつたであらう。

今の世は幾多の熊谷を生むべき時代である。幾多の軍神たちは皆生死を超越してゐる。わづか二十二三の若さで、よくもあの境地まで行きついたものである。生死の問題は常に考へなければならぬ。しかし生死觀にこだはり過ぎてゐると死ぬべき時に死に損ねる。

「死にます。死にます。君の爲に死にます」この一念のみに軍神は生まれた。

「死にます。死にます。一切をまかせまつりて」この一念に凡夫の往生は遂げらるゝであらう。

二三日前から庭の萩が咲きはじめた。秋が近づいたやうな氣がする。まことに生きてゐることのありがたさとともに歸り來ぬ人々の世界を懷ふものの切なるを感じる。

水泳の注意



○水に入る前に充分體操をやつて各關節や筋肉に充分豫備運動を與へます。

○汗をかいてゐるのにそのまゝ水に入ると身體によくありません。

○身體の全部を水でぬらし、特に頭をぬらしてから泳ぎます。

○水に入る時、耳の穴へは綿などで

フタをせず、オリブ油かゴマ油を小指につけて塗つておきます。

何もなかつたら唾を塗るだけで宜しいのです。

○耳に水が入つたら入つた方の耳を下にしておくと自然に出ます。

無理に叩いたり何かで耳の中をほじるのはよくありません。

○水から上つたらぬれた水着を長く着てゐるのは身體を冷やし病氣をおこすものになります。

○強い日光で身體をやくとヒフがあかくなつて炎症をおこします。

○水から上つたら身體が温つてから入らないといけません。

○足のつった時には落つて足の親指を強く内側にまげると直ります。

○コガラガヘリといつて癢れんをおこした時は落つてもみません。

落つてさへゐれば身體は大して沈むものでありません。例へ身體



が沈んでも自然にまた浮ぶものです。

○日中の陽の強い時に泳ぐのはさけた方がよく、朝は十時頃まで、

午後は三時頃からが宜しいのです。○疲れてゐる時は泳がぬこと、一

度に疲れる程長く泳がぬことが大切です。

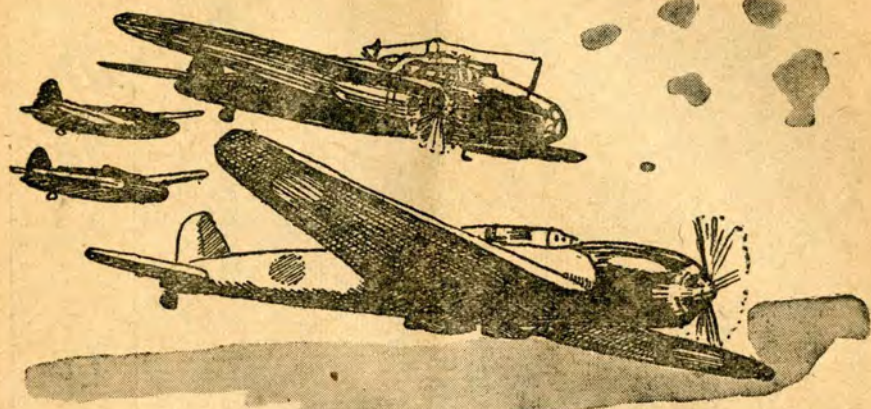
○危険區域に絶対に入つてはいけません。場所によつて水流の變る所や水温の違ふ所があります。

○自分が危険になつたり、他が溺れさうになつたら大聲で助けを呼ぶことです。

○船が難破したらなるべく身體を動かさぬやう板につかまるか、立泳ぎをして救助されるのを待ちます。出来ることならいかだを組んで上に乗つてゐます。

○また服を脱ぎすてゐることはいけません。なるべく多く着て體温を保つやうにします。

○悲觀したりあわててはいけません。落ちついて心を強くもち、附近に誰かがゐたらお互にはげまし合つて氣持をしつかりさせておきます。



歎 佛 偈 講 義……五……

世界を動かす力 ちから

大 野 法 道

一

人雄師子にして神徳無量なり

功動廣大にして智慧深妙なり

光明の威相、大千を震動したまふ

佛徳を讃する結びの中、前の前偈は佛に見られぬものであつたが、これから

の一偈半は佛に見られるものを挙げたのである。

ところが佛の尊い姿は、喩へてみると大きな梵鐘がそれを撞く力に應じて、

いくらでもちががつた響きが出るやうなもので、見る眼によつて限りなく、如何や

うにも見られるのである。この偈に「神徳無量」とあるのは此意味で、「神」は

こゝでは不思議のことである。但し不思議とは、何だか譯のわからぬもの、又

は想像も及ばぬほどの大變なものを言ふのではない。佛の姿はいつでも、どこ

でも、いくらでも、尊い物事となつて、人々にわかるやうに出るのが不思議で

ある。こゝからこゝまでが佛に見られる姿であると、定められない所が不思議

である。

さうした無礙自在のすがたは、佛格、つまり佛の人格に具はる徳であるが、その佛格を「人雄」といふ。この人雄といふ語は、佛の異名として多くの經に用ひられるが、そのわけは

千々を敵と爲して

一夫これに勝つも

未だ自らに勝つを

戦ひの上となすに若かず

自らに勝つは最も賢なり

故に人雄と曰ふ

とあるに明らかである。之は法句經の述千品に出る「人雄」の解釋で、よく佛格の動く意味を顯はす。

こゝには敵とか、勝つとか、戦ひとか、戦争關係の用語を以て佛格が説明されてゐるが、戦争にも種々あることはこのやうに古くから既に佛敎が注意してゐる。つまり動く方面からみれば、佛は戦ふものであることを明らかにするのである。

武力戦、經濟戦、思想戦といふ語は、近頃では支那事變から一般に用ひるやうになつたが、武力で言へば、前線の

皇軍の赫々たる武勳は、世界の人々の驚歎するところであり、敵國人の肝を寒からしめてゐるが、國民の心得としてよく言はれるやうに、戦ひはまだ入口である。此半年の戦果を最後まで持ち續けねばならぬ。その道はたゞ「自らに勝つ」にある。一層の強い自信を振ひ起し、日夜に頭を擧げてくる一切の我儘、自由氣分を一掃することが、自らに勝つゆゑである。

二

經濟戦、思想戦にしても同じことである。これらは武力戦に對するほどの、明らかな戦果は、未だ擧がつてゐないが、新秩序の建設とともに、漸次に開發されてゆくに違ひない。

そこで、もし大東亞の廣い地域に藏する物質の豊かさを、狸の皮算用で見積つて、いち早くいゝ氣になつたり、目の前に出てきた物資をおろそかにして、贅澤したりしたのは、經濟戦には勝てるものではない。思想戦となつては、更に精神的である。日本人たるの自覺が何より肝心である。無上尊嚴なる惟神の道を基本とし、皇國民の信念に開導せられる、中正の思想を以て、偏邪なるものと戦はね

ばならぬが、敵は手をかへ品をかへて、どこまでも押しよせて来るに定まつてゐるから、それに對抗して最後の勝を制するためには、自らの信念を時に應じて磨きつゞけ、思想を社會相に順じて練りぬかねばならぬ。もし一刻たりとも練磨の手をゆるめたら、敵はその隙間を覘つて忍び込むから、今あるものを信じつゞけ、しかもどこまでも、その本當の光りを輝かすやうに勤めることが、自らに勝つゆゑである。

「自らに勝つは最も賢なり、故に人雄と曰ふ」と解釋したのは、このやうに佛は戰ふことを告げるものであるから、今、佛を信じ行するのには、此大戰爭を勝ち抜くために、極めて意味ふかいものであらねばならぬ。

「師子」はライオンのことで、よく戰つて一切の邪なるもの、妄なるものを降伏させる人雄、即ち佛の徳を譬へたのである。

三

人雄の佛の徳は無量であるが、それらのすべては「功勳廣大」といふに盡きる。なぜといふに、それは凡そ「功勳」とは何であるかを考へればよい。何事によらず、お國の爲

めになる眞の働きに功勳は具はる。わが身の手で足で、口で、乃至頭でする一切の働きは皆それであるが、今、最も明らかに見える姿は、前線の將士の働きであり、また銃後を守る國民の自覺に張りきつた営みである。

それはたゞ今日だけのことではなく、われ／＼の祖先は、よくお國を守つてお國の爲めに働いたが、千三百年このかた一貫して、その働きの底に流れて居るものは佛の信仰で、それが文化の形となつて顯はれたのが、文學、繪畫、建築、彫刻、音樂、演劇などにわたる佛教文化で、更に政治、經濟、産業、交通にまで及んだこともある。これらの文化はいづれも皆、お國を飾る莊嚴相ならざるものはないのである。佛の信仰は、日本に於てよく國體に合致して、人々の立てし功を培つたが、東亞の諸國には、古くから、それ／＼の國に皆佛の信仰がある。それらのすべては、人を通じて表はれた佛徳が、お國に盡した「功勳」の外のものではなく、それが、時に於て二千五百年、處に於て大東亞の全土にわたるからには、これを「廣大」と言はなくて、外に言ひやうはないであらう。

このやうな廣大なる功勳は、その本となるものがしつかりしてゐるからである。

「根深くして條茂し」といふ言葉があるやうに、この度の皇軍の大捷に、諸外國は全く驚いてゐるが、實はその本となるものが、日本には肇國以來、しつかりと具はつて居り、光榮ある歴史は、絶えずそれを磨いてゐるのであつて、今更ら何も驚くことはないのであるが。米英は、日本のこの根の深さを見るを忘れ、たゞ目の前の量の物だけで見てゐたから、いざ開戦となれば、つき／＼に違算から来る敗戦の苦杯を嘗めねばならないのである。

佛の廣大なる功勳の本は證りである。その證りの根の深さが「智慧深妙なり」である。證りのこと、智慧のことは既に前に話した。

四

佛のさとのりの根の深さが、どれほどの力をもつかを明らかにしたのが「光明の威相、大千を震動したまふ」の二句である。つまり世界を動かす力があるのである。

物を動かすにはすべて力が必要。しかもその力にしても種々ある。木の實が落ちるのは引力のためであり、蒸汽や電氣の力は汽車や電車を動かすが、金力では動く人と動かぬ人があり、難解の書となれば、學力がなければ動かない。

進退谷まつて動きがとれなくなつた場合、忍力さへ確かなら、いづれ活路は開かれる。

日本は今、大東亞新秩序の建設のために動いてゐる。いかなる力が動かしてゐるかを考へるなら、肇國の大精神たる、八紘爲宇の活力を内因の第一原因とし、蔣介石の抗日政策、それを支援する米英の助力を外縁の第二原因とする。但しこの蔣米英の外縁は、大東亞のために坐視するに忍びない、妨害をするものであるから、日本は斷然立つてかれらを懲らし、飄迷開悟させようとするのであるから、第一原因の崇高なる、八紘爲宇の大活力とは逆の意味で、日本を動かす力となつてゐるのである。

けれども、この外縁とても、之あるためにそれをきつかけとして、大東亞の正しい秩序が出来て、從來のやうな、無理に歪められた天地が一掃されることゝなれば、そこに

「淨土」の店賣りについて御願ひ

前々號に「淨土」の店頭賣りを中止するやうに社告しましたが、都合によりまた一般書店に於いても淨土を頒布いたします。但し「賣切制度」を實施いたしましたので、讀者はあらかじめ取つけの書店へ御申込おきを願ひます。印刷部數の都合で從來のやうに店頭に並べて買ひ手を持つと云ふやうなことは御座いません。尙五月號は都合上「淨土」の渡らなかつた書店もあります。右は御諒承願ひます。(係)

も新秩序に引きよせる、一つの力がないわけではない。佛敎ではそうしたことを、逆縁と呼んでものごとを大きく見る見方を教へてゐる。但し逆縁は決して歡迎すべきものではなく、彼等敵國が一日も早く目を醒して開悟し、本當にあるべき姿の、大東亞を望み見て、引き込むことを日本は念願してゐる。

五

もしさうなれば、日本は最早や動かぬかと言ふに、大東亞に新秩序が打立てられるまでは、どこまでも動く。打立てられてからでも、それを維持し強化するためには動くことを止めない。第一原因の八紘爲宇の大活力を以て動かざるをえないのである。たゞしその動きやうは、大東亞の諸民族と國とを、本來のあるべき姿にあらしめて、この世に生れたかひのある喜びを得しめるやうに取り計ふのである。この大活力は、實は東亞に限つたことではなく、全世界までも普ねく及ぼすべき、本來の徳を具へてゐる力である。

佛のさと、智慧の光明は、曾て東亞を照して、廣大なる功勳を立てたやうに、今も、今後ともいつまでも、三千大

千世界にあまねく震動の手をさしのべるのである。この場合、震は振であつて、佛の信仰に由り、人々を物を國を、本當のあるべき姿に立ち還らせ、本來の面目を振り起すやう働きつゞけつゝあるのである。

◇これまでは譯もわからずお念佛をまねごとに申してゐましたが、淨土をみてから、心地が違つて感じられ、この頃は又かわつた有難さです。私古い淨土を揃へて持つてゐますが、その何れも垢づれがしてゐる程よく拜見してゐます。毎日御本を繰り返し讀んで日夜幸な日を暮してゐます。(神戸市林田區寺地町一ノ八四中本千代)

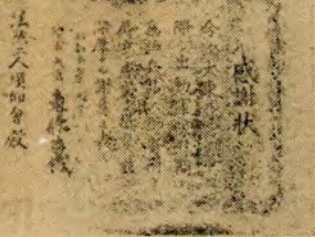
◇海に陸に實に聖戰の大戦果が次々にあがつて我等國民の感謝をいやが上にも深めしめてゐる。更に今や長期戰の完遂に向つて邁進してゐるのであり、この時局に當り我等淨土教徒、法然上人、續仰會々員の我等は念佛護國の祖師の御遺訓を奉じて大東亞共榮國の淨土建設の經綸のため不退轉の決意を以て進まなくてはなりません。各自が鉢を打ちハンマーを振りペンを持つて念佛を通じて重大時局をのりきらねばなりません。これが念佛行者否皇國々民の奉公の道です。皆様とともに皇國に生を享けしを壽、念佛を身心にて勵み皇恩祖師の恩に應へ奉らんと誓願します。(東京市世田谷區小柳萬)

會のたより

陸海軍大臣感謝狀

卅二通を授與さる

明るく正しく感謝に生きる職域奉公に邁進すべく精進してゐる本會は時局下ますますその責任の重大なることを自覺して各位の御後援のもとに鋭意努力致してゐますが、前號本欄に記載の通りこの本



會の活動に對し陸海軍大臣より三十通の感謝狀が授與され、陸軍病院長から四通の謝狀がよせられてゐました。而して本月になり更に陸軍大臣より感謝狀が二通授與されました。これは大東亞戰爭開始以來始めての感謝狀にて本會部員一同は大いに感激し、發奮して、いよいよ御奉公の誠を至すべく期してゐます。かくて陸海軍大臣より授與された感謝狀は實に三十二通の多きに達しました。

本會理事會開催

眞摯な意見續出

本會理事會は六月二十七日午後二時から明照會館樓上に於て開催され、中村理事長から十六年度の事業報告、收支決算、十七年度の

豫算、事業計畫等につき説明したが、右各報告の都度に出席各理事

因に當日出席者は次の通りであります。

から熱心な質問並に意見開陳があ

會長 里見達雄氏

つて、豫算決算その他全部を承認

理事長 中村辨康氏

し同四時散會しました。尙同席上

理事 木村玄俊、安井大學、杉

で理事から述べられた質問の内主

浦演順、小橋麟瑞、福田有誠、佐

なるものは次の如くであります。

藤良智、小川秀善諸氏

淨土宗讀本を初め本會出版の圖

本部員 道瀬幸雄、村瀬秀雄、

書の中で品切れのものが多く、

池田閑基

早く再版を出す工夫がないか。

本會員又は淨土宗徒の座

淨き友の會 信仰座談會案内

右におくべき必携書か或ひは信徒用の勤行式を出版する計畫はないか。

永らく御休みになつて居りましたが、左記の如く九月から開催することになりました。どうぞ御さそひ合され御來聴を歓迎いたします。

淨土宗報國會と提携して

本會趣旨の徹底を期する用

一、場所 東京本郷東片町七八（白山上）橋本方

意はないか。

會員が増加する一方なの

一、議題 法然上人法語抄解説 中村先生

に用紙の配給を増してもら

淨き友の會幹事

ふ工夫はないか。

淨土隣組座談會

老壯年の鍊成

しています。

座長 いや確かに、いまの老壯年

者の中にピンと來ない人があま
す。小生もその内かも知れません

丁造 やあ御無さたしました。
座長 お爺さんがゐないと常會が
淋しくていけません。

甲雄 若い者も負ける位
にたつしやだからな。感
心してしまふ。

丁造 大部はめられまし
たな。だけど愚老も大い
に努力はしてますすぢや。
わしの目からみてもわし
位の年輩か、もう少し若
い壯年のものに一番嫌な
奴が多いやうぢやから本
や雑誌になるだけ讀んで
時代に遅れぬやう努力は



が、悪い外國思想の入つて來る最
中に育つたわれ／＼が一番日本に
相應しくない考へを持つてゐたの
で、人一倍努力して身についた錯
を落さなくてはならないのですね
乙郎 失禮ですが電車や汽車に乗
つて座席をふさいだり、他に迷惑
をかけてゐる者に老壯年者が多い
やうです。

丙子 列車に乗つて「誰か來るの
ですか」と他から注意されるまで
平氣で席をふさいでゐる人を見る
と氣が變なものでないかと思ひます
わ。その人の氣持が判りませんね。
丁造 一億一心の今の世にいつま
でも時代遅れな奴があるなら許し
てをくわけにはゆかん。列車の車

掌が何故注意せんのかやらう。

座長 まあ怒らんで下さい。悪い
習慣を一度通つてきた老壯年者の
方が若い者より一層鍊成が必要で
せう。尤も自分の行爲で悪い點の
あることに氣がつけば直るのも早
いわけだが。

甲雄 乗り物ばかりではありませ
ん。他人に迷惑をかけることは
勿論、更に「親切と感謝」ですべ
て暮したいものですな。緊張と笑
顔、これが明朗のもとでせう。

乙郎 日常に何んでもない小さな
事に大きな影響を受けることが多
い。例へば買物一つしても小店
員が不親切だつたりすると不愉快
な氣分がなかなか抜けなない。

戊枝 有難いといふことを知らな
い人は必ず佛罰が當りますよ。

丁造 先づ感謝ですわい。

丙子 戦地から歸つた人が、日本

に來てから手足をのばしてねられるのが有難くて、涙が出たといつてみましたわ。

戊枝 まったくね。私達はほんとの苦勞を知らないからですよ。

旺盛なる責任感

座長 先程まで來客があつていろ



いろ話をしたのですが、ある報道部長の話にコレヒドールを攻撃の際、舟艇隊の操舵手が戦死して息がきれるまで舵を離さなかつたとか、又ある舳手が舳綱を持つたまま上陸部隊の揚陸が終つても動かずにゐるのでよく見ると、舳綱を身體にまきつけたまゝ全身蜂の巣

のやうに敵弾を受けて絶命してゐたとかありましたが、何んといつてよいか言葉のない崇高さですね。

乙郎 軍隊位に責任感の強いものはないでせう。俗に軍隊は申し譯がきかないと云ふ通り責任を果さなかつた理由は何んであらうと成りたないのですから

甲雄 珊瑚海海戦にも軍艦が沈没する瞬間自分の配置を一步も離れず艦と運命を共にした兵があり又沈みゆく母艦の小窓から真白い艦内帽を打ち振りながら戦友と分

逃げ出す水兵がよくとれてゐましたわ。戊枝 皇軍の強さにはほんとに涙が出ますね。座長 われわれも銃後のつとめを



果すのにこれに劣らぬ責任をもちたいものです。

丁造 會社などでも何かあると辭めればいゝと考へる輩があるが、その責任は辭めたつてせめを負つたことにならんわい。

甲雄 辭職しろとはいふが、切腹しろとは云ひませんからね。

乙郎 責任を果すには切腹と決めてゐた武士はさすが偉かつたですね。外國人なんてこれをハラキリといつてとても理解出来なかつた。

丙子 新聞の寫眞に珊瑚海で沈んだ敵の母艦サラトガ型が載つてゐましたが、あれを見ると我先きに

丁造 捕虜になつたのは前線にゐ

たからで勇敢な證據であるなんていふ外人に判るわけがない。

貯蓄の勵行

座長 一つその意氣で職域奉公をすると同時に、貯蓄の方もがんばりませう。

甲雄 する氣になれば幾らでも貯蓄は出来ますよ。

丙子 まあ、お金持ちね。

甲雄 金持ちではないさ。毎日働いてかせいでゐるのも、ぜい澤したり遊んだりするためではないといふことですよ。

乙郎 昔ならいくらでも費つて御覽に入れたものだが……。

丙子 今は貯蓄のためですの。

甲雄 貯蓄とばかり限らないが、きりつめた生活で押し通せば貯蓄は必ず出来ます。

戊枝 いまままでの暮しは何うも手

がこみ過ぎましたよ。洋服に和服洋食に和食に支那食、洋間に日本間とこれではいくら骨折つても無

駄が出てくるわけですね。

丁造 少なくともこの蒸し暑い時に洋服は不適當ぢやね。

汗をかきかき洋服着てるのは氣の毒になるよ。といつて半ズボンできたい足を出して

ゐるのも感心せんね。

乙郎 勤め人がゆかたで出勤

するわけにもゆきませんが、何んとかしたいですね。尤も

國民服が出来てから禮服が要らなくなつたのは大助りですが。

土地の習慣

丙子 話は違ひますが、南洋の子供は煙草をのんでゐますわね。

甲雄 支那の子供も煙草をのみま

す。街で遊んでゐる小さい子供が

煙草をくはへてゐるのはとても妙なものですよ。

座長 日本が指導者になつたのだから悪い習慣は改めさせることが



出来ませう。

乙郎 しかしやたらに改革を強ひるのも考へものでないでせうか。

座長 勿論さうです。土地の習慣はなるべく尊重すべきでせう。今

村軍司令官のお話の中に、民心の

離反は實に怖いもので三百四十年の搾取政策は、一日にしてその

蓄積をくつがへしたといつてをられます。そして東印度五千萬の原

住民は確かに怠け者で氣力が乏しいが、これを親切に指導してや

なくてはならない。こうして新たに皇國の恵みを與へて南方幾千萬

の民の心をしつかり掴み更生奮起せしめることが大切であると説かれてゐます。

甲雄 なる程。或る印度の女志士

が靴下をはいてゐない子供と同席出来ぬと英國人から動けぬまでに

打ちすへられたうらみ、靴下をはかない子供を無理に母親の腕から

もぎとつて旅客飛行機から下させ

たといふ英國の暴虐は一生忘れぬと叫んでゐました。

戊枝 そのくせ外人は大人でも背

を全部出してゐたり、男も女も足

光因と罪人

水戸黄門で知られてゐる水戸中納言光因卿は義公とも云ひ、尊皇の道を唱へた人である。あの時領内に親殺し事件があつた。加害者はすぐにその場で捕はれて、調べられた結果親殺し



に相異なく當然のことに罪状も決つて法の通りに御仕置となる

こととなつた。

ところがこの罪人はただの無學文盲と云ふより更にその愚鈍さに至つては驚くばかりで御仕置になるのが不満であるとして次のやうに申し立てた。即ち

「他人の親を殺したのなら、それアお咎もあつて重いお仕置にもならうけど、おらが親を殺したのだから別に悪くもあるまいに、お咎を受けるなんて心外でさア」

これを聞いた光因卿は何を思つてかその親殺しの罪人をしばらく御仕置にするのをとめてしまった。さうしておいて罪人を或る儒者のところにあづけて三ヶ年の間みづちり學問を仕込むやうに云ひつけた。そして若しこの命令をおろそかにし、罪人の訓育を怠つたならば儒者をも罰するであらうと嚴命を下した

かくて三年がたつた。罪人は三ヶ年の間に互つて儒者からいろいろ學問を授けられ、人としての道も教へられた。そのおかげを以て愚鈍極まる罪人ではあつたが勉學してみて初めて親殺しの罪が如何に重いものであつたのかがよく判るまでになつた。罪人は今さらのやうに驚いたり悔いたりするのであつた。

しかしすでに犯してしまつた罪は何うしようもないのであつて、その罪人は日に己が所業の恐ろしさにふるへた。自分の罪の恐ろしさが判つてくるともうそのまゝすませてゐるわけに行かなかつた。罪人はすぐ光因卿のもとに是非とも自分を嚴罰に處してもらひたいと進んで申しこいた。ここに於て光因卿は初めて法の通りに罪人を處罰したのであつた。

を出してゐますのにね。一度受けた暴虐は忘れられないでせう。

甲雄 ずつと昔に中央アジアの回教國の人が日本が回教信者であつたらといつて惜しがつたといふことだが、これも回教が世界一と信じてゐるからで宗教や習慣については餘程考へてやらぬといけないでせう。

丁造 若し外國の軍隊が日本に来て、神殿を奴らの寢室にしたり、佛像に腰かけたりしたら日本人は何んといつて怒るかを思へば彼等に對しても無茶は出来ない。

丙子 戦争に敗けたら大變ね。

座長 絶對敗けられません。何があんでも勝ち抜くのです。そのためにお互は感謝の心で親切に、無駄をはぶいて少しでも澤山に貯蓄しませう。

(山崎善一畫・編輯部記)



本會
前總裁

岩井智海猊下の思ひ出

眞野正順(談)

岩井智海大僧正猊下が御西遊遊ばされたといふ報を手にして、あの元氣な猊下がとまづ驚き、本會のために一方ならぬ御指導を頂いてゐるだけに思はず淋しさが胸にこみあげてくるのであつた。殊に本會の創立當時のわれわれを激勵し、指導して下さつた御厚情は決して忘れることが出来ないものである。本會を育てゝ下さつた第一の恩人をいま失つた悲しみをつくづく味つてゐる。

丁度近頃のやうに蒸し暑い日ばかりが續いてゐた昭和九年の夏のころであつた。社會大衆の佛教に關する興味が澎湃と起り、これを何うか正しい道に引き入れて行きたいと誰かが企圖したのであつた。この全國にみなぎつた氣運をわれわれは佛教復興であると云ひこの氣運に乗じて日本佛教の中心たる法然上人のお教へを世間一般に明示してこれを知らしめたいといふ願望にもえたつた。だから當時二三人のものが寄るたびに法然上人の偉大なる人格がよく世間に判つてゐないのは如何にも残念であり、また佛教復興のほんとうの

結論は上人の偉大な人格に來る外はないのであると語り合つたものである。

この法然上人の偉大なることを世に知らしめる事業を興すには先づ金と力が入用である。その内で力の方は満ちてゐたのだが、發乏同士の集りだから金がない。その金も少なくとも二、三萬圓は必要である。ところが、當時の實力を以てしてはその十分の一すら難しかつた。このやうに初めの内はただ何んとかしたいと言ひ暮すだけで何うにも手が出せなかつたのである。しかし他方でいろいろ相談の方も進んで行つた。第一にこの事業は宗祖に對する報恩のためである。一生に一度と思へば一人あて五百圓づゝ位は出せないこともあるまい。さうすれば三萬圓位を集めるのもさしたる難事でないから、この金を一つにかためて一舉に費つてしまふ。丁度香をたいてその後に灰しか残らぬやうに「法然上人」を社會に向けて叩きつければ後に何が残らうともよいではないか。かう相談が決つたので、

先づ報恩の香を集める手段を講ずることになり、ここに於て初めて本會の第一歩が踏み出されたわけである。

そこで第一に京都に出掛けて行つた。祖山に詣り岩井猷下にお逢ひした上、われ／＼の考へや事業のことを申し上げ、何卒御獎勵の御高志を戴きたいとお願ひして奉加帳を差し出したのである。猷下はしばらく考へておいでの様子であつたが、やがて「現金でいますぐ入用なのか」とお問ひになるので、いや現金でなくても御記帳だけで結構で御座ります」と

答へた。すると猷下はフト座をたたれ奥に行つたが、

間もなくまた座にもどられ、金五百圓を奉加帳の上に載せて下された。私はこち

らの依頼通りの金額を下されたものと思ひ、奉加帳を開いてみたらそこには金千圓也と記されてゐた。この現金は即ち千圓の内の半金なのであつた。

猷下はわれ／＼の新しく興す宗祖鐵仰の事業に卒先して多額の記帳をして下され、直接鞭撻されたわけである。猷下のこの御厚情に勇氣百倍し、それから次々にこの奉加帳を持つて廻つたところたち



まちにして一萬五千圓の資金が獲得出來た。かくて昭和十年本會は成立したのであつた。

その後本會は各方面の絶大な後援のもとにすく／＼と育つてます。盛盛をきたした。各所の反響も大きく何れもわれ／＼を激勵してくれる態のものであつた。かくて昭和十年十月二十日の夜には大阪大手前國民會館に於て法然鐵仰の夕を開催するはこびとなつた。この大會は實に盛大を極めたものであつた。

大會の前一ヶ月位から大阪の全淨土宗寺院は勿論のこと、その他の要所にボスターが掲げられ、慎重にしても必至な準備運動が續けられた。

大會は、開會前すでに千五百名の聴衆が集まり、立錫の餘地もなくなつた。月影バンド、コーラツキカゲの六十名による獨唱合唱が公開され感激の内に會が進められた。故矢吹慶輝博士、佐藤春夫、中村辨康各氏の講演がいよ／＼大會の感動を湧かせた。私はこの時舞臺裏の地下室で忙しく働いてゐたが、瀟灑なりをして一見五十歳の紳士が私に面會を申し込んできた。早速その人に會つてみるとこの見知らぬ來訪者は黙つて私に部厚い手紙を差し出し

「後で御覽下さい。」

と云つたまま歸つて行つた。私は一體何ごとであらうと封を切つて開くと、中からは次のやうな書翰とともに金千圓也の現金が出てきたのであつた。

(手紙原文) 菊薫る深冷の折柄慈々御淨安に涉らせられ、祖德宣揚の爲め日夜御精進遊ばされ、關西に於ての第一聲を拜聴するの光榮を拜謝致します。

大德の勞苦を拜し甚だ御無禮とは存じますが、老生二片の至誠として香木の資も僅少なから蔵金申上ずますから、何とぞ貧者の一燈としてお嘉納を願いますれば、有難き仕合せと合掌申してお願ひ申し上げます。向寒の折柄御身御大切に御精進を賜らん事を懇願致します。

昭和十年十月二十日

眞野正順様 蓮下

氏 名

後で知つたことであるがこの紳士は天王寺の近くに住む石井重助氏(號は通德)といふ佛教篤信者であつた。何分本會最初の大會を開催中であつたので、少なからず興奮してゐた折でもあるし、全くの初対面の人から受け取つた手紙の中から千圓の金がヒラ／＼出てきたのである。われわれの感激ぶりも非常なものであつた。それに同封の書翰にも本名が明記してなく、まったく匿名の寄附であるから氏名を出してくれるなどの初めから固い注文があつたので、今ま

で石井氏の御芳志は公表しなかつたのである。しかしすでに月日も経つたことであり、ここに改めて公表し石井氏に感謝の意を表する次第である。

さて同じ年の冬の初めであつたが所用のため私が京都に行つたことがあつた。この際前々からのこともあり御禮のため祖山に詣でて猊下にお目にかかつた。猊下は相變らずわれわれ若い者の宗祖懺仰運動に對して期待せられ、激勵の言葉や讃辭まで下さつた。そして尙猊下といろいろ話があつたが、一寸したことから次のやうなことを話されたのである。

大阪に住む猊下の信者の一人が、ある日猊下を訪れて何かよいことに金を使ひたいのであるが何がよいのか教へて下さいと申し出たことがあつたさうである。すると猊下は色々と考えてから、いま法然上人懺仰會といふのが出來て運動をしてゐるが、この會は仲々純眞なものでよい會であるから、この會のためにお使いになつたら宜しからうとお教へになつた。そして更に言葉をついで云ふには、會を援助することは名をむさばることではないから何うぞそのおつもりで、とその篤信者に對して御注意になつた。この一信者こそ他でもない石井重助氏その人であつた。さてこそ大阪に大會が開かれるや自身でわざ／＼訪れて金を寄附し、しかも猊下の御注意を守つて飽くまで匿名で押し通したわけであつた。

私はここで白狀するが、大會の夜に石井氏から金を受け取つた時

歌

壇



喜久代選

秋田市 小崎 蓮葉

水色に空の明るみひんがしに月照り出でて桐の花見ゆ

評 作者は視覚型の人であるらしい。月の出前の暗さから水色が

大空一體が明るみひんがしの方が殊更あかるんで来たことは桐の花見ゆの五句で十分に表現されてゐる幽婉な一首である。

北海道 前野 賢一

鈴蘭のよき香のぼりぬ何になれ形となれよ友に送らん

評 かう云ふ幻想を伴ふ歌がもつと出てもよいと思ふ。歌は心内のきまざまの感動を言葉に捉へたものであるから、夢も幻想も

大きくあつて欲しい。作者は腹都とかを鈴蘭の野に立つてゐたふと、もしこの香気が空中に立ちのぼり凝つて一つの形を

なして呉れたらどんなによいだろう。

愛知縣 稻本 利一

おほわたにたたかふ兄が病む我に

送り給へる錢かしこしよ

評 おほわたは大海原の意である。作者は病氣をして呻吟してゐる。病苦と共に男子としての

大みいきに働けない心苦しきも痛切にある。しかるに海軍軍人となつて大海原に戦つてゐる

兄が、あべこべに自分を慰めて俸給の中から療養費を割いて送つてくれてゐる。それを受取る

心持は、忝いともありがたいとも、申譯ないとも簡單には申し

申べようもない。

大分縣 淺輪 桃舟

十字星仰ぐ夜母や谷一つへだてて陣す敵の聲する

満洲國 鶴岡 慈禮

ふるさとを偲べるならん戦友は守

唱歌ふ静けき夕べ 名古屋市 江崎 孝藏

わが母は歳こそ老ゆれ、今もなほ

すこやかにして在ます嬉しさ

静岡縣 一向 山人

悼與謝野夫人

今ははや世にいまさぬと思ひつつさびしき臙青葉にうつす

東京府 小柳 萬

ほのしろく見ゆる紙片にわが歌を記しぬるかな月光のもと

東京 細田 初枝

あたらしき歴史うまるる大御代に母となるかな感激をもて

朝鮮 三浦砂千子

何處より包ひおこすか知らねどもたつて来よと花の待つらん

東京 上野 昌子

夜更れどはるけき國につつを取る夫を思へば腫牙えけり

新潟縣 北條 竹香

自分より年下の友の急死に歳下と云へど七路越えし君逝きてさびしや残されし身の

北海道 石川 章

みいくさの後にそなへきほひつつ若き弟は炭山に入る

東京 小山 しづ

たらちねの慈恵にもまさる大慈悲の大みひかりに涙すわれは

京都 吉本 悦男

わが陰の炊事場に群れつゝいぼめる雀子明日も来て遊べかし

東京 水谷 良子

一人ゐて憂き日もありし草庵のみ佛戀し荒びゆく日は

北海道 深谷 哲哉

鈴蘭の薫れる峠夕日さし三光鳥の口疾くも啼く

京都 竹内 修吾

一寸ちに水漬く屍となりて散りかへらぬ艇を伏し拜むかな

京都 福島孝治郎

還らざる潜航艇のニユウスありきて我が胸張りさけんとす

熊本縣 五野 一三

母います時に愛でにし花葵咲きぬ墓に手向けまつらん

北支 渡邊 明道

ただひとつ誠の心持てるのみ名無く富なく力なけれど

朝鮮 中村 茂舞

北の海沖へはるかに一刷の墨繪にも似し半島の影

岸和田市 田中 廣真

われもまた國民兵に召されけり甲斐なき身ぞと嘆きつる身に

はがきに一同二首以

内とし、浄土編輯部歌壇係あて住所氏名明記の上送ること

投稿規定

はがきに一同二首以

わが國に詩歌あつて以來の第一人者、古の紫式部の散文と共に現代の我々が後世に傳へて誇りとするものは故與謝野晶子先生の詩歌であります。先生の三代に亙る功績は後世の人がよく知つて呉れることと思ひますが、眞の詩の何たるを知らない平俗、低級この現代の流行短歌全盛の時に當つて、些かでも先生の教導を受けられた淨土歌壇の投稿各位の清福を私は思ひます。先生の後を承けて選を致すことは、非

常な光榮であると共にまた

歌壇選者の言葉

岩野喜久代

非常な内省と緊張を覺えます。先生の殘された道をあやまることなく私は進んで參りたいと思ひます。ついでには投稿各位にも作歌の態度について、一應御理解おき頂きたいことがあります。歌は全人格の現れであります。一

首と云へどおろそかに安易な投げやりな、平俗な氣持でお歌ひにならぬやうにして頂きたいのであります。それには平素深く考へ、深く物ごとを視、豊かに内に湛へる感情がなけ

ればなりません。歌を作る素地は決してたやすいものではありません。投稿者の大方は佛教の信仰に生きられ、精神生活の高いところに住される方と思ひます。佛道修行も短歌修業も等しく命を削つて、光明世界を把握することに變りはありません。一首に全我を傾けて、愛と美と眞實の世界を創造することは、歌をもつて淨土を現出することになります。

歌は議論や、思想や、觀念や記述ではありません。

ません。作者の心内に起つた激しい感動の火を、燃え上つた刹那に言語に捉へるものですから、どこまでも眞實でなければ不可ず、どこまでも律動がなければなりません。歌は云ひかへれば言葉の音楽です。

眞實と云ふことについて、今の世の短歌をよく多くの人は誤解をしてゐます。日常生活の誰の眼にもふれ、誰の心にも共通に味はれる常識感情が眞實だと思つて、精神生活を昂

揚赫灼たらしめ、未來を創造する夢や幻想を非眞實だと見なし、つまらない平板な感情ばかりを歌つてゐます。さう云ふ人にはお釋迦様と迦葉尊者の拈華微笑の眞實は分りつこありません。人間の持つ大きな理想は高貴を求める人間の精神生活上の眞實ではありませんか。釋尊の菩提樹下の悟りの内容が眞實でないといつて云へませう。自分に理解が出来ないわからないから、あの悟りはうそだと云ふやうな臆斷が、現代の歌の上では平氣で云ひはされてゐます。私は佛教徒の皆様が、輝くばかり高い自内證を言語に彫つて頂きたいと希望いたします。人間の持つ大きな夢は人類を進歩させますが、目前の常軌的生活は何程、寫しとつても人間を偉くはいたしません。この大御代が出現させたのは大和民族三千年來の夢の結果です。私共は深い感動をもつて、現代に生きまた未來を創造したいと思ひます。技巧等については追々申上げることとして、先づ初めに一言、根本態度はかくありたいと云ふことを述べました。



婦道清明

江上秀靜

一

此頃の健民運動はよいことと思ふ。それに
つけても女の人々の健康なことが一層望まし
い。

身も、心も、清浄に

さて汽車に乘合せて女の群を見る。朝な朝
なの通勤は引き締つて、仕事前の希望の色が
見える。心強く思ふ。夕方の汽車になるとそ
れが疲れて氣の毒に思ふ。かてゝ加へて心の
動搖、混濁、その交はす言葉の野卑に、動作
が粗雑に見える。働いて、働いて下さるのに、
何にも思ふまいと控目になるが、このところ

女の一生の大切な時である。

人毎に、銚後の働きといふことを、男子の
不足を補ふ女子の手足とのみ考へるけれど、
それは未だし考へ足らぬことである。銚後女
の力はやつぱり「教養の進め」にある。身も
心も、二つながら健美であることが大事であ
る。そこから良民が生れる。國神が生ひ立つ。

二

人間と、人間を取捲く世界、人間の方に眼
耳、鼻、舌、身の五ツの「も」とで、があつて、
人間を取捲く世界から色、聲、香、味、觸の
五ツの境界を取る。

おつかひ

俊雄君はお家の裏の原つばでさつきから野
球に熱中してゐました。俊雄君の組の方が何
うも旗色が悪いのです。危いところで三人退
けて、今度は攻撃の番です。俊雄君は一疊か
ら勢ひよく馳けてきました。そして後の二回
の攻撃で何うしても三點入れないと敗けにな
るので「みんながんばらう」と相談しました。

丁度その時お家の裏所から塀ごしに、二階
に住んでゐる上田さんが大きな聲で「俊雄君
煙草を買つてきてくれないか」と云ひまし
た。俊雄君はすぐ「買つてくるよ」といふな
がら裏所まで行つて上田さんからお金を受け
取つてきました。煙草屋は原つばの向ふ側に
あるので、こゝから赤い看板がよく見えま
す。俊雄君は一寸馳けて買つてこようかなと
思ひましたが、野球が敗けてゐるので席をは
づすわけにゆきません。

人間五ツの「もとで」を「五根」といふ。五根の修養は大切なことである。五根の上に一つ「意根」がある。これで合せて「六根」である。

「六根清浄」、「六根清浄」、われ等の祖先は何とよい言を使つたものだ。寒行、裸参り、さては富士登山、みんな六根清浄の掛け聲である。身も、心も清浄に、勇氣のある掛け聲である。

念願するところ、この五根、六根の教養に就て、もう少し意を留めて欲しい。そしてそのことがどれだけ今の婦道に必要なことであるか。女子教養に大切な事であるか。

「概には云へないけれど、若い女の方は色聲、香の夢が多い。壮年から老年へ向ふ女の方には色、味、觸の實際が多い。家庭に於ける嫁御と、姑との摩擦も多くこの喰ひ違ひである。

夢といふけれど、夢見ることの教養こそは女の一生を支配する。美はしき色と、音楽と

そして薫りと、人生とりく／＼の花こそ、さまざまの實を結ぶ。

三

現代伶俐な婦人が何故に淺薄な教養で満足して居るのか。齒の浮くやうな會話、それだけが今頃の人の感覺なのか。安價な慰安、それも「五根」の表面だけを擦めたり、擦ぐつたりして行くもの、そんなのは魅惑でも何でもないのに。

教養の時期、教養の機構、それは餘りに短かく、餘りに乏しい。多くは街頭で拾つた教化でもつて個性を作り上げて居る。中には「間諜」の「示唆」であることも知らずに、それを受入れて居る人もある。流行の型なぞと云ふものが女一代の教風であつては、お國の爲めに慨かたしい。

箏箏、長持は女の身代ではない。腕につけた職能も女の生命ではない。「婦道」こそは女の命である。

それに一番打者が一壘に出たところでです。俊雄君は煙草のお金をボツケに押し込むと二番打者に



「打つて出る打つて出ろ」と聲援しました。しかしまたしても敵のために後の三人は凡退しました。

いよいよ俊雄君の組最後の攻撃になりました。俊雄君が最初の打者で一壘に出ました。次の打者も次の打者も打つて壘に出ました。俊雄君は生還しました。後二點入れれば勝ちです。夢中になつて聲援しました。だけど後援續かず俊雄君の組は八對七で敗けてしまひました。友達たち

日本には古來この大切な魂を以て、言はず語らず、いつも家庭の訓育とした。國としての教養は時世を貫いて居た。

戦線でも、銃後でも、國の忠良を育て上げるのは女の役目であり、慰安の標示でもあつた。婦道成つて其處に國家の歴史があり、繪巻物があつた。

四

女學生の頬や、耳朶に薄い生毛が伸びて居る。それが學園を巢立つた途端に氣に成り、削つて磨かれ、クリームで柔められると、俄かに光澤を増し、彈力を持ち、張り切つたゴム毬のやうに變つて来る。

造化の魔術なのか不思議な變化。教化の必要、「六根清淨」の修養もこの時から急に始められねばならぬ。五根のみを瞬間々々の「うつらひ」に任せて、「意根」が置いてきぼりになると、淺墓な女のみが街頭に充滿する。頬紅塗つたり、素地の見えぬ程に厚く點けた唇

紅、あれはジョーカーとか何とか云ふ道化者の眞似であるのか知らぬ。それではならぬ。日本の女はもつと底知れぬ力を湛へて居る。

慈悲の權化であり、敬愛の實踐である。愁ひも、笑みも、自分を生殺して以て他を生かす力を持つて居る。「觀世音」の力、「地藏」の力、これこそ日本婦人の心であり、教養の進みである。

五

端座して禮拜する時、この時を多く持つ習慣をつけて欲しい。これが朝夕に出来る女であれば婦道に入り易い。そしてあんなにいつも、道中まで七ツ道具を持ち歩いて、化粧の手入れしなくとも、禮拜の時から何とも云へぬ相好の整つてくること、光澤を持つことに心附いて欲しい。

清菱、明朗、婦道の成つた人の前に立つと「母なる哉」の敬ひを生じる。

はもう一度試合しようと言ひましたが、俊雄君が「僕一寸煙草買ひに行つてくる」と云ふと外の友達はずまらなうな顔をして散り散りになつてたま投げを始めました。

俊雄君は友達にすまない氣がしましたが、「すぐ来るよ」といつて煙草屋の方に馳け出しました。煙草を買つてそれを上田さんのところを持つてゆきました。上田さんはお客さまと何か話をしてゐましたが、俊雄君の顔を見ると、「ずい分早かつたね」と云つて又お客と話を始めました。俊雄君は「野球してゐたので遅かつたのだよ」と云はうとしたが、上田さんが眞面目な顔をしてお客と話してゐるので止めてしまひました。おつかひを頼まれてすぐ買つて来なかつたのに早かつたと云はれて俊雄君は嫌な氣がしました。

俊雄君は下において友達のを待つてゐる原っぱには行かずに雑誌を持つてゴロリ横になりました。

それ以來俊雄君は上田さんが大嫌ひになりました。

俳壇

太田耳動子選



京都市 拜郷 賢三

鳴き止みてほと息づける蛙かな
評 小鳥や蛙が、いたづらに鳴いてゐるのではないといふことを、此の句から教へられる

廣島市外 山口 勇治

満汐の岸につかりし花菜
評 取り立てゝ云ふ程の場所でもないが、斯くの如く一句に纏め上げてみると詩情棄てがたいものを感じる

大分 浅輪 桃舟

灯を消せどなほ金龜蟲居るけはひ
評 作者の心の動きが、はつきり見てとれるところが良い

朝鮮 三浦砂千子

濃き淡き緑の中に夏が来る

北海道 花田 順往

日盛りは木蔭にさけてあまりあり

京都 佐伯 静園

枇杷うまく苳豊かな寺に來よ

大分縣 田邊 春草

のつと出る鯉の頭や藤の花
深川區 細田 初枝

強き日や單衣の裾に蟻の列
小樽市 平井 正念

蠟燭の北面高し春の風
岩國市 長岡 白朝

座右皆聖賢の書や蚊をいふす
新宮市 奥村 映水

白き蝶やがて吹雪の花にきく
京都市 竹内 修吾

藤棚を落る乙鳥に人氣なく
奈良縣 清水 我聞

時雨忌や雨の音さへきこえる
越中 内山 徳堂

行春のふたがみかけて鳥糞り
青森縣 丸尾 傳山

竹の子はのび放煙の深山かな
三重縣 澤 赤峯

兒がくみて來りし清水冷かに
神田區 小山 しづ

良き人の住みふりにけり花の窓
愛知縣 傷痍軍人療養所 稻本利一

たゝかひは此處にも勝てり麥の秋
大和 寺田 規譽

尼寺の大根おろしの辛きかな
北海道 深谷壽恵野

十勝野の廣きに雪の來りけり
北海道 平井 正念

零して柳の緑灯を迎ふ
神田區 江崎 孝融

鎌々や母を背負ふもまた樂し
島根 石見 久翠

奉仕隊奏笛吹きて續きけり
朝鮮 中村 茂舞

アカシヤの花しらしらと散る夕
栃木縣 大輪 清

川風に靡きて森の新芽かな
熊野 竹中八洲子

花吹雪麥の穂波にすはれゆく
東京市 白石静風子

夕闇に黄鮮かな月見草
北海道 前野 賢一

蒼穹になびく端平の鯉鱗
於夕張 平井 正念

坑口と熊穴暗し春の山
東京 坂口 光雄

溪流のしぶきにぬれて若葉かな
富山市 新田 愛染

村はいま静かに昏れつ五月雨るゝ
満洲 淺野部隊 鶴岡 慈禮

満人の煤けし部屋の十柱花
甲府 坂本 數雄

蛙鳴いて故郷の田を思ひけり

大分縣 河野 善隆

春雨のしづかにかほるマストかな
和陸赤 北垣 千里

鞍はづす掌の腹だこの汗ばみて
高知縣 横山 亮安

つなぎたる馬立ち眠る柳かな
岐阜縣 立木 眞澄

星とてもなくて螢の飛びあへる
京都市 福島孝治郎

朝風のただよひめし青田かな
北海道 療養所 長谷川初男

梅盛り水車谷間にこだまえる
名古屋 堀場 典雄

おのづから色濃く淡く植田かな
東京 小谷 良子

夜嵐の意もなく蝶二つ
大阪府 森 正義

小さき蛾の機だたるを見えありぬ
京都市 岡野 静月

おのづから新茶頂き心満つ
滋賀縣 重野ふみ子

託兒所や夏帽大き子らの顔
飯田市 古川八重子

緑おほふ桶の若葉や忠魂碑
島根縣 林 良碩

まぶしさに仰ぎ見たりぬ夏の雲

投稿規定
官製はがき一回二句以内とし住所氏名明記
内の上「淨土」編輯部併
境係あてに送ること



創作

茄子畠

ばたけ

碑 徹 雄

茄子を自慢氣に風呂敷包から出して見せた。

「あらッ」

と女房も思ひがけない大量の茄子に、家も見ない先に氣に入つてしまつたやうである。

それで一家そろつてその家を見に行く氣になつたのであるが、行つて見るとなる程、畑を宅地につぶしたばかりの、新開地と云ふのであらうか、茄子、トマトの畠の真ん中とでも云ひ度い處にその家があつた。

「いゝわ！ これなら茄子でも胡瓜でもトマトでもふんだんに食べられるわ」

と女房には臺所の責任が軽くなることが第一一氣に入つた。

「それで、家はどうなんだ。家を見に来たん

だぞ」

茄子畠にばかり注目してゐる女どもにすこし腹を立てゝ私はとなりつめた。

「家もいゝじやないの、臺所が氣に入つたわ」と女房はすこぶる簡単に片付けてしまつた。女共にはお惣菜と臺所が一番氣になるらしいのである。尤も私も今までちやちな借家ばかり住んでゐたから、建物の良し悪しは充分には解らない。郊外だけに庭が比較的廣くつてあつて、南向きの縁側が冬には日なたほつこの出来るほど充分明るく出来てゐるので満足した。それに野菜物もなるほどこゝでは充分に間に合ひそうであるし……矢張り幾分は茄子に釣られてその家を買ふ事にき

去年の夏、東京の市中は野菜物に相當不自由した。

大根を半分、胡瓜を一本買ふのに行列を作ると云ふやうなこともあつた様である。

その時分に私は郊外の方に轉居した。家を探しに出かけた義妹が、

「近所がすつかりすつかり茄子畠なの」

と家そのものよりも茄子畠に惚れこんだ口ぶり、その家の賣主から分けて貰つて來た

めてしまつた。金に釣られると云ふ話は聞いてたことはあるが、茄子につられると云ふ話はこれが始めてであらう。

さて、トラツクもない不自由な引つ越し騒

ぎもすんで、その家に住み込んで見ると、勤めの行き歸りの多少の不便はあるが朝晩の市の中とは思へない静かな環境が有難かつた。女共は野菜物が畑で買へると云つて鬼の首でもとつたやうに喜んで、わざ／＼以前の家の隣家の奥さんをよびよせて例の茄子や葱等を分けてやつて得意になつてゐた。

引つ越した時から氣が付いてゐたのだが、垣根越しの隣の島の真ん中に「赤木醫院建築敷地」と云ふ標識が建つてゐて、

隣者の地所なのだが、その醫院が立つまではそこで自家の食べるだけの野菜を作つてゐると云ふ風であつた。で、例の茄子もトマトも



さつま芋もと云ふやうに二百坪程の敷地を色々な種類の菜園に作つてゐた。私の家の東向きのぬれ縁に立つて見ると垣根越しにその島がすつかり見渡せるのだつた。

或る日曜日に私がそのぬれ縁に突つ立つて風に當つてゐると、その島の隅の方に一人の畫家が三脚をすえて薯の葉を熱心に寫生して

ゐた。まだ若い男で、白いテニス帽をかぶつて、晩夏とは云へ、まだ暑い日射しを一つばいに浴びて熱心に筆を動かしてゐる。日本畫家らしいのである。

「感心なものだな」

と私が云ふと、傍の女房は

「そうよ。毎日來て寫生してゐるの。毎日あゝやつて何時間も寫生してゐるのよ。暑いのにね」

と感に堪へたやうに云ふのであつた。

「あゝ云ふ畫かきなんて云ふ仕事も仲々大変だね、然し他にわづらひがないから、その仕事に打ちこめるから面白いだらうな」

私は自分の仕事のいろいろなわづらはしきで少し閉口してゐたので、思はずそんな漠然とした歎聲をもらしたのであつた。

「なんだか知らないけれども、一日あゝやつて寫生してゐるのだから感心だわ、お茶でも持つて行つて上げようかしら」

女房は家にゐれば／＼寝ころがつてばかりゐる亭主にくらべて、或ひはそう云ふ亭

主を激勵する意味でか無闇に感心してゐるのだつた。

それから小一時間もしてまた何に氣なしに隣の畠を見ると、まだその畫家はをつたが、もう歸り仕度をしてゐるらしく、三脚なぞをたゝんでゐた。そしてすつかり仕度がすむと、おもむろに邊りを見廻してから、茄子畠の方へ入つて行つて、茄子を三つ四つ五つともぎ探ると、それを素早く袂の中へ押し込んで、「なにくはぬ顔」と云ふ顔付きでさつさと歸つて行つてしまつた。

「……なる程」

と私は何んと云ふことなしに歎息をもらしたのであつた。

x

秋も段々深くなつて來た。さつまいもの出る時季になつても芋の出廻りがよくないの

で、殆んどわれわれの口に入らない有様なので、女共はその話をしては、しきりに食ひ意地を張らしてゐた。それを聞いてゐたもの

か、五つになる長女が

「坊やおいもが食べたいんだけれど」

と云ひ出した。子供にかう云はれると親は甚だ情ない氣持ちになるのである。その子は云ひ出すと聞かない方で、なだめるのに骨が折れた。

「お前たちが芋の話なぞをするからだ」ととなりつけて會社に出かけてしまつたが、歸つた時には子供ののおねだりの事なぞはすつかり忘れてゐた。

夕食のあとで、ところが、新芋のふかしたのを義妹が盆にのせて持つて來た。

「待望の芋が手に入つて嬉しそうだな」と私は女共をからかひながら、あまり好物でない芋に手を出した。その細い新芋が實にうまいのである。

「これはうまい」

と私はめづらしくも二三本食べてしまつた。

「こんなうまい芋をどこで手に入れたんだ」大方隣組から配給にでもなつたのだらうと

思つてゐたが案外にうまいので、女房に聞いて見た。

「さあ」

と女房は云つて、妹と顔を見合はしてゐるのであつた。義妹は「あのう……」と云つてあと言葉を濁してゐる。

「おい、自分で買つて來て解らないのか」と二人の顔を見くらべてゐると、妹が澁澁告白した。

「實は長女があまりおいもが食べたいと云つて泣くので、悪いとは思つたけれども、思ひ切つて隣の畠のをだまつて失敬して來て食べさせた残りだと云ふのである。」

「ひどいことをしたなあ」

と私は急にいま食べた芋のあと味の悪さをあぢはいながら、二人を睨みつけたのである。うまいはずだ、とりたての芋だ。と、私は前の畫かきのことを思ひ出した。

「おい、とつたのは芋だけか」

茄子までもとつて來たものを食べさせられたのではやり切れない。

「まあ、ひどいわ、おいものは切ばつまつたんですもの」

と彼女は辯解したが、私は懇々と説諭しなければならなかつた。

そしていつまでもあと味が悪かつた。

縁と云ふものは不思議なものである。

その後女房が胃薬をやつて苦しんだ時に、隣の島に看板を出してゐる赤木と云ふ醫師が四五町離れた所にゐるのでその人に頼んで診察して貰ふと云ふ羽目になつた。

夜中二時頃だと云ふのに、人力を飛ばして来てくれて、親切に見てくれたのは、やがて隣り附合ひをしなればならないと思つたからであらうか。

その晩義妹は姉のために私も感心する程良

く立ち廻つて働いてくれた。

女房もすつかり治つて、禮がてら、診察して貰ひに赤木醫師を訪ねた時に、義妹を是非

赤木氏の甥の嫁に貰ひ度いと云ふ話を先方か



ら切り出して來た。

それから、色々ないきさつはあつたが、話は圓滿に進んで見合も結納もとどこほりなく

終つた。

その結納の日に赤木醫師は

「もうこれで親類ですから」どうぞそのつもので付き合つて下さいと、親類と云ふ言葉を嬉しそうに何度も云ふのであつた。

そして「新類ですから、隣りの島の野菜物も自由にとつて下さいよ」

と云はれた時には思はず義妹の顔を見て、苦笑するばかりであつた。

◎是非御試用下さい！

益々元氣旺盛
山田中將湯
固形にんにく粉末
神傳五藏湯
特約店を
大募集中です

静岡市上香谷町
神谷昌孝
電話二八六三番

艇海掃ガンマ 土淨

坊やの教育 山崎善一

「ダツチハーバーで敵の航空母艦は……」
「もし〜閉店です、お湯を抜きますヨ」



お氣の毒なヤンキー

利用かつぢ

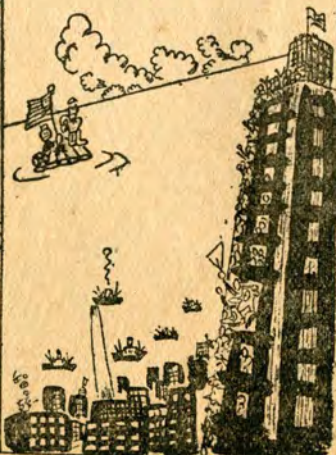
「ヒヤ〜我等
のアメリカ艦隊
が歸つて來たぜ」



唯ちや歸れまい

川口 久

「アレ帽子が郵便局
「旦那、只今大東亞
戦争國債の賣出し中
ですヨ」



の本月大水
金金金

川口 久



米艦上の亂闘

山崎善一

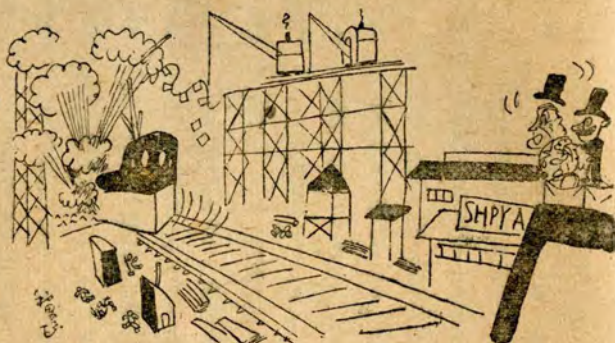
「バカッ
あわてるな！
あれは味方の
潜水艦だ」



戦々競々の太平洋沿岸

和田かつぢ

進水したトタンに
「キヤッ日本潜艦だ」
となるのも近い内だらう



南への慰問袋

山崎善一

「アナタ慰問袋集めにきま
したよ」
「一寸待つてくれ、すぐ簡
易扇風機が出来るんだか
ら」



信 仰 相 談

自分を立派な人にしたい

解答 中村辨康
(質問 歡迎)

(問) 自分は常々立派な人間
になりたいと怠らず考へ

て居りますが、ただ徒らに考へて居るだけではと存じ、若干の毎日の行爲目標を立て、見ました。然しやはり駄目です。唯だ墮落するばかりで、自分ながら情けなくなつて迷つて居る者です。

私の望むところは、あらゆる惡魔を亡ぼして、誠實の心を以て勉強したいのです。突然ながらよき御導きを幾重にも御願ひ致します。一日も早くお教へ下されますやう。(麻布・一迷青年)

(答)

御氣持は非常に御立派で結構でございます。さうして常に反省な

さることは、やがて實際の行爲を少くとも御希望に近いところまで爲し得るやうにならうと思ひます。

誰にしても人間はみな心は弱いのです。た

だ或は多少頑張り得るか、又はすぐ妥協してしまふかに依る相違に過ぎないのです。頑張る人を普通に意志の強い人と云つて居ますがその頑張りもハツキリした理念を以て反省しつゝ内魔の跳梁跋扈を抑へ、外魔の誘惑に眼をふさいで行くやうにするのがその方法ではないかと思ひます。理念とは例へば「時間」に關して考へを明確にすることなのですが、

よい反省材料となりませう。即ち私達の命は結局「時間」であつて、この時間の集積が自分の持てる壽命であり、そしてその壽命の時間數はどの位あるか自分には判然しないが、大體六十歳位までと見當をつけるにしても、それは過ぎて見れば全く束の間であつて、あの時計のカチカチと鳴るあの音がかさなつたのが命であつて、あのカチカチの音は自分の命のけづれて行く音です。

つまり私達は寸秒と雖も自分の命を消費しつゝ生きて居るのです。だから自分の命を食ひ減らしつゝ居るのが事實ですから、私達は何事も「いのちがけ」であります。意識してもしないでも命がかけられて居るからです。されば食べるも寝るも「命懸け」ですし、映畫を見るのも欠伸をするのも皆な命が減つて行くのです。

今日は日曜だから「遊べる」と喜んで居ても、その實は自分の尊い「命」が無駄に費されて行くことを喜んで居るわけで、實に無反省も甚だしいと痛感しなければなりません。然しこのこれでもないかと痛感する時、強い自制心が起つて、自分の弱い心をひきしめて頑張ることが出来ると思ひます。かう云ふ場合に内魔たる自分の心を覺めると共に、一方に外の誘惑に近付かないやうに心がけて行

信 仰 相 談

きます。

實際勉強もさう續くものではありませんから時々散歩しなければならず、また日曜などは休養する必要があらうと存じますが、その休養も成るべく健全娛樂をするやうにしたいです。たとへば謡曲を習ふとか、お仕舞を習ふとか、或は和歌俳句をやるとか、弓を引くとか、聯珠などを稽古するとか、又はテニスをやるとか色々ありますが自分の趣味に合つたものの稽古をすることは外の惡魔に近づかない一方法だと思ひます。

なほ慾を申しますれば、理窟と實際とは中々一致しませんから、念佛の信仰に依つて何處までも宇宙の大生命たる如來の増上緣力の加祐を祈念して、身を守るやうにして行かれるやう、おすゝめします。

むかし阿難尊者が誘惑にかゝらうとするとき、自分で自分の心を

何うすることも出来なくなり、一心に釋尊を念じて「南無佛陀耶」と唱へたところ、心に光りと勇氣とが湧いてその誘惑からまぬかれることが出来たと申すことであります。

私達もまたこのやうに如來を念ずることに依つて誘惑をまぬかれることが出来るでせうと思ひます。信仰と申しますと、若いものにはまだ必要でない、年とつてからでよいとよく言ふやうですが、それは昔流義の封建時代の信仰であつて、本當の信仰を知つて居ないからであります。信仰は人間生活をよりよくする爲のものですから、むしろ若い人に最も必要なもので、若い人達は信仰に依つて積極的となり、立派な人間として立ち得るやう

なものです。

では、その信仰は、と云へば、念佛の信仰をこそと申し上げたいです。信仰の現行的効果は「自己改造」と「周圍淨化」とにあると申して差支へありません。周圍を淨化するには自己を改造しなければなりません。自己を徹底的に改造するには、少くとも自分の周圍を淨くしなければなりません。

自己と周圍との淨化は互ひに相關聯して進められて行きます。然しさうすることが、やがてまた周圍から「立派な人」として尊敬されることにならうと思ひます。折角御自愛下さい。

數珠と供物と御經の讀み方と

念佛の信仰のことなど

(問)

數珠を手にかかけ念佛を唱へて佛様をおがむのと、日蓮宗のやう

そして何う云ふわけでせうのですか、御面倒でもお知らせ下さい。

に數珠をするのと、何うちがうのですか。

また淨土宗ではお國子を上げますが、眞

信 仰 相 談

宗ではお園子を上げずおびき飯ばかり上げるのはどう云ふわけですか。

淨土宗と眞宗とは本家分家であるのに何う云ふ譯で三部經を讀むのに唱へかたが違ふのですか。

またお念佛を唱へても我の強い人は救はれず、お念佛を唱へなくとも惡心のない無我の人は救はれて行くと思ひますが何うですか。またせいを出して念佛唱へても死ぬ時申さなければ佛様が救ひに來て下さるまいと思ひますがちがひますか。

また或る本にお念佛を申しても地獄に落ちるとありましたが、それなら申さない方がよいと思ひますが、それは何う云ふわけですか。自分ばかりえらい人になつて人の惡口を言ふからそれで地獄に行くのだと思ひますがちがひますか。

愚鈍念佛で馬鹿になつて上手でも下手になつて居ればよいと申しますが、それでよ

いですか。

次にお念佛に進みがありませんが、何うしたら進みがあるやうになりますか。人の命は露のやうなものであしたのこともわからないのに、なぜ多くの人はお念佛をはげまないでせうか。此の頃お寺でご馳走を出さなくなつたら寺參りがうすくなりまして。信心に來るのではなく御馳走をたべに來るのです。これを何とか本當に信心する心にしてやりたいと思ひますが何うしたらよいでせうか。中村先生様、どうぞおからだをお大切に。(青森・東津輕・平館・丸尾 久二)

(答)

澤山の御質問ですから簡単にお答へさせて頂きます。先づ數珠のことですが、元來は數を取るための道具であつて、する爲のものではありません。するの眞言宗で祈禱の時にいらたか數珠と云つて、そろばん珠のやうな數珠を摺つて音を立て、惡魔への威嚇をなしたことから眞似するやうになつたのです。一説には弘法大師が宮中で

御進講の時、その終りの合圖に數珠をならしたのが始まりだとも云ひます。淨土宗では二連數珠を用ひますが、それはお念佛の數を取るためでするものではありません。一般的には佛教徒を表象する標識のやうに考へてよいでせう。

次ぎにおびき飯とはお佛供飯のことと存じますが、お供へものは何でも結構であります。

人間のたべるものならば何でもよろしいと思ひます。然しくさい物は困ります。ですから魚とか肉とかは勿論、野菜物でも香りの高いものは嫌ひます。清淨の感じがしないからです。

また淨土宗に限らず一般にお園子を上げるのは、お園子を以て百味の飲食を代表するものとして居るからです。お佛供飯はそのまた代用です。

眞宗でもお園子を澤山作つて丸く積み上げますが、それは非常に手數がかゝりますから、何か特別の大法要の時でないといけないの

です。ですから眞宗でもお圖子を絶対に上げないわけではありません。

次にお經の讀みかたが眞宗と淨土宗と異るのは宗旨が異ふからです。何事でも別立して相當の年數がたちますと、段々異つて來るものです。

言葉などでもさうです。方言が夫々ちがつて居るのはさうした關係からです。氣になさるほどのことではありません。

信 仰 相 談

次ぎにお念佛についての御質問ですが、大體に於いて私達人間はみな凡夫であり祿でなしでありまして、善人は一人もないと云ふことを土臺に置いて、その上で解釋しないといけません。若し自分を善人と思つて居る人がありますならば、その人は無反省の祿でなしです。無我心だの善心だのと云ふやうなものを持ち合はして居ないと心得るのが本當なのです。何かの拍子で無我心のやうなものが起

つたとしても、それは親しい者に對して一寸そんな心が起つたのであつて畢竟依怙を離れて居りません。

だからどんな人でもみな罪惡生死の凡夫なのです。ですから誰も彼も念佛をたよりとして如來様のお力に依つて救つて頂かなければならないのです。

次ぎに臨終來迎の問題で、普段に本當にまごころを以て御念佛して居る人ならば、臨終には必ず來迎があるからみな救はれるのです。外見で念佛が出ないやうに見へても、死の寸前には屹度御來迎に預りお念佛が出る筈です。よしそれが私達の耳に聞えず目に見へなくとも問題とするには足りません。その反對に平素念佛にせいを出して居るやうでも唯だ外見のおていさいを飾るためにやつて居る人ならば、御來迎もあるまいと思ひます。外からの觀察で斷定してはいけません。

次に念佛しても地獄におちると或る本に出て居たことですが、前後を見ないとわかりませんし、そしてそれは何と云ふ人が何と

云ふ題で書いたのか、その實物を拜見しないと何ともお答へは出来ません。愚鈍念佛のことは大體結構だと思ひます。

次ぎに念佛の進みのこと御尤もです。眞宗の本に嘆異鈔と云ふのがありますが、唯圖と云ふ人がさう云つたやうなことを質ねて居ります。

それに對して親鸞上人は、「お前もさうか私もさうだ」

と云はれ、煩惱生活には多生曠劫の昔から馴れて居るが、念佛は今生で始めて聞き得たことであるからそれで進みがないのでと云つて居りますが、全くその通りだと思ひます。法然上人の御法話にもあつたかと思ひます。

お説のやうに露にも均しい命のことを考へればググ／＼しては居られませんが、私達は兎角目の先のことだけに氣を取られて本當のことをなほざりにして居ります。まああせらずしかもたゆまず、色々と反省を促がすやうにしむけるより外に方法はありませんでせうね。



繩跳運動の指導

厚生省體鍊課

出口 林 次 郎



澤山 う一つだけ個人で跳ぶものの方法
のものを述べて、次に幾人かが一種にな
のがつて跳ぶ團體繩跳の二、三につい
て申し上げませう。

腕交叉順廻旋交互片脚跳

繩跳運動について大部難しい跳
び方までもいくつか説明しまし
た。しかし跳び方の種類や方法に
ついて申し述べれば未だこの外に
いので止めます。そこで最後にも

腕交叉とは普通に跳んでゐて繩
を廻しながら腕を身體の前で交叉
させたり腕を解いたりすること
です。また順廻旋といふのは、繩を
普通に後から前へと廻すこと
です。そして交互片脚跳とは片脚づ
つ右と左と交代させて跳躍するこ
とです。

さてこの方法で跳ぶのには、先
づ初め普通の順廻旋で跳んでゐ
て、繩が足下にきたなら右脚で跳
び、繩が頭の上に来たなら同じ右
脚で跳びます。このやうにしてゐ
て(第二十五圖)、次に繩が頭上か
ら身體の前に廻つてきた時に、腕
を身體の前で交叉させて今度は左
脚で跳びます。(第二十六圖)繩が
頭上にきたならまた左脚で跳び、
今度は交叉してゐた腕をほどこい
て、もとのやうにして右脚で跳びま
す。(第二十七圖)このやうに普通
に跳んだら、次は又腕を交叉させ

團體繩跳び

團體繩跳びで用ゆる長繩の長さは大體

二間か三間位のものが適當であります。

二人が一緒に繩を廻す時には二人同時に腕を大きく廻し、肩をあけぬやう胸を十分に張ります。また時々左と右とで廻す腕を換へた方が宜しく、このやうに繩を持ち換へるには繩が頭の上に来た時に持ち換へます。

て繩を廻し左脚で跳びます。(第二十八圖)



第二十八圖



第二十九圖



第三十圖



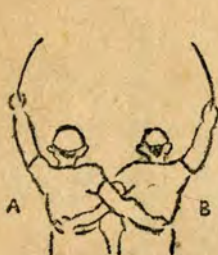
第三十一圖

これだけのことを順次繰り返して跳び続けるのがこの方法であります。

●

個人繩跳の方法が餘り長くなりましたので、次は團體で跳ぶ方法を少しく説明しませう。

團體繩跳は何んといつても協力の精神がなくてははいけません。五人なら五つの心が、十人なら十の心が一つの點に集つてなされ、お互ひが目に見えない親しみに結ばれてはじめてなしとげられるものであります。

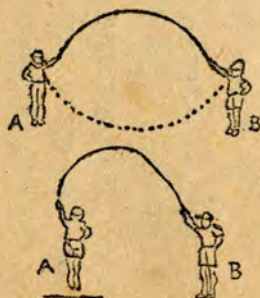


第三十二圖

二人(三人)組合單獨廻旋跳一つの繩で二人又は三人が一緒に跳ぶ方法です。先づその内の一

で持つて跳ぶ方法と、二人が横に並んで腕を組み合せて一本の繩を二人で持つて跳ぶ方法とがあります。

(第二十九圖左)



第三十四圖



人が個人跳びで普通に跳んでゐて他の人が前からか後からか廻る繩の中に跳入つて一緒に跳びます。また三人ゐれば個人跳びで跳んでゐる者の前に後に一人づゝが跳入つて跳びます。(第二十九圖右)

又この跳び方でも同じ方向に重

つて跳ぶ方法と、二人が横に並ん

で腕を組み合せて一本の繩を二人

第三十一圖



二人組合
共同廻旋
共同跳

一本の繩

の兩端を二人が持つて廻してゐて

初め二人が一本の繩を廻してゐて他の一人がこれに跳び入つて跳びます。(第三十一圖右)そして次には繩を持つて廻してゐるものが同じやうに跳入つて二人一緒に跳び(第三十二圖中)二人が同じ繩で跳んでゐる所に、更に最後に残りの一人も一緒になつて三人で腕を組み合せて跳びます。(第三十一圖左)

圖左

三人組合共同廻旋共同跳

繩で二人が跳びます。また繩から一人づゝが出ます。この場合の繩は短い繩を用ひます。(第三十圖)



短繩共同廻旋九人組合跳



第二十三圖

初め二人で繩を持つて廻してゐて、他の六人がそれぞれ一人づゝこの廻つてゐる繩に跳び入つて跳び続け、そして最後に繩を持つてゐる二人も一人づゝ繩に跳び入り九人が一緒になつて跳びます。

(第三十二圖)

共同廻旋
複合跳

これは七人が一緒に跳ぶもので繩も大中小と長さの違ふ三本を用ひます。先づ最初に二人が



第三十三圖

大繩を持つて廻してゐて、この中に中繩を持つて廻してゐる二人が跳び入つて跳びます。そして次に小繩を持つて個人跳びをしてゐる者が跳入つて跳びます。

この際大中小の三本の繩は同時に



廻し始め、同じ調子で同じ方向に廻します。つまり三本が同じやうに同じ速さで廻つてゐます。



こうして跳んでゐる所に最後の

二人が個人跳びをしてゐる者の前と後とに入つて跳ぶのです。(第三十

三圖)

×

以上幾つかの跳び方を申し上げました。

又これら繩跳び



による競争遊戲もいろ／＼行はれてゐます。上に説明した方法は何れもその場所で静止したまゝ跳ぶものを述べましたが、前進しながら跳べば、この方法によつても競争が出来ます。個人跳びでもよし、團體跳びでもよし、幾組かに分れて繩跳びをしながら走れば競争が出来ます。(元)

(カットは筆者の片腕水平旋廻踏

切跳び、文責在記者)

これは便利

油紙に字をかく

油紙や雨傘などに字を書くときには、スズリの中に少し酢を入れて墨をすり、それで書けば雨にぬ

れても消えません。

赤ちゃんのヒフ

赤ちゃんのヒフは弱いのでただれ易いのですが、若しただれたらタネ油を薄くぬつて、その上からシツカロールをぬると早く治ります。

ガラス器を洗ふのに

ガラス器は洗つたならばザルの中に入れて水を切るのが宜しいのです。フキンで拭くのはガラスの面を曇らせるものになります。

カボチャとトマト

カボチャはよく實が入つて、肩が高く張り、デコボコが多く、大ききの割に重いものがおいしいです。
トマトはへたの切口の新しいのが新鮮なしろしで、黒くしなびたものは古いのですから味もまづく栄養分も少いわけです。



法語
解説

阿彌陀佛に依てのみ完し

……法然上人法語（その八）……

中村 辨康

法語

一切の諸佛に各々惣別二種の願あり。惣とは四弘誓願これなり。別とは釋迦の五百の大願、藥師の十二の上願等のごときこれなり。今この四十八願はこれ彌陀の別願なり。〔法語抄三〇「選擇集第三章」〕

本願といふは阿彌陀ほとけ、いまだ佛になり給はざりし昔、法藏菩薩と申し、古、佛の國土を淨め衆生を成就せんが爲に、世自在王如來と申し、佛の御前にして、四十八願の大願を起し給ひしその中に、一切衆生の往生の爲に一つの願をおこし給へる、これを念佛往生の本願と申すなり。即ち無量壽經の上卷にいはいはく、若しわれ佛を得たらんに、十方の衆生至心に信樂して我が國に生れ

んと欲して、乃至十念せんに、もし生れずば正覺を取らじ。已上〔法語抄三一「和語燈錄」〕

阿彌陀ほとけの御誓ひには、有智無智をも選ばず持戒破戒をも嫌はず佛前佛後の衆生をも選ばず在家出家の人をも嫌はず、念佛往生の誓願は、平等の慈悲に住して起し給ひたる事にて候へば、人を嫌ふことは全く候はぬなり。されば觀無量壽經には、佛心とは大慈悲是なりと説きて候なり。善導和尚この文をうけて、この平等の慈悲をもて偏く一切を攝すと釋し給へり。一切の言葉廣くしてもるゝ人候べからず。〔法語抄三三「和語燈錄」〕

三世の諸佛もいまだ是の如きの願を發し給はず、十方の薩垂もいまだ是等の願はまします。

解 説

(法語抄三四『三部經釋』)

どんな人でも人であるかぎり「願」のない者はありません。完全な身口意の三業を所有して居るのは人間ばかりであつて、植物は勿論のこと、動物も完全なものを持つては居りません。また三業のうちでも意業は人間のみの特色であり更にその意業の内でも願望するところは全く人間のみに有する働きであります。

然して願望と慾望とはその内容が違ひます。慾望は大概眼から下のもの、即ち五官の満足を求めるものであります。願望はもつと高い精神的なものを含んで居ります。

佛教に言ふところの願は「希求」の義であります。理想を希ひ求める心の働きであります。願力、願主、願意、願書などと熟字するところを見ても想像がつくやうに、精神的なと云ふよりも、もつと清い宗教的なものに多く使用されて居ります。

ですから人間の望みの中から物質的な望や官能的な望を取りのぞいて、より清くより高尚な望を選ぶのであります。それを最も高いものにしたのが「菩薩の願」なのであります。

然らば菩薩の願望は何う云ふ内容を持つべきでせうか、それは

無上菩提を志求し、一切衆生を度し盡さんことを要期すると言ふのが菩薩の「總願」又は「弘誓」と云ふものですが、かの四弘誓願がそれであります。普賢の十願なども之れに屬します。

四弘誓願は御承知のやうに

衆生無邊誓願度

煩惱無邊誓願斷

法門無盡誓願知(學)

無上菩提誓願證(成)

でありまして、一切の人々をして「よきもの」たらしめんとする主目的のために、煩惱を斷じ盡し、法門を學び盡し、菩提を成就せんとするのであります。

如何なる菩薩もこの「四弘誓願」の上に立たなければなりませんからこれを「總願」と申します。つまりは

主目的 成就衆生

副目的 淨佛國土

なのであります。

然し之れを何う實現するか、その實際の方法になりますと、人に依つておのづから異なるものがありまして、其人其人の工夫にまつべきものであり、誰でも同じと云ふ譯には

行きません。例へば飛行機を作るとしても、其人／＼に依つて色々工夫をこらしますから、色々な異つた性能の飛行機が出来、だん／＼高性能のものが出来て来るやうなものであります。

でこの「人に依つて異なる」ところの「願望達成方法」を「別願」と申します。阿閼佛の二十願、文殊菩薩の十八願、藥師如來の十二願（又は四十四願）、阿彌陀佛の四十八願、釋迦如來の五百大願などみな「別願」と云はれるものであります。この中釋迦の五百大願と云ふものは大數に約して「五百」と云つたまでのもので五百箇條の願を立てたと云ふではありません。これは一體悲華經と云ふ御經に出て居るものです。即ち釋迦如來がまだ因位の菩薩であつた寶海と云ふ梵志の時、寶藏如來と云ふ佛の前で誓願を立てたのがそれでありまして、因位の菩薩の時から八相成道して入滅に至るまでの釋尊の一切の行爲は、みな悉く此時の誓願に基づくものであるとして居るのでありますから、實は五百箇條ばかりでなくもつ／＼澤山にあるべき筈ですが大體藥師の十二願、阿彌陀の四十八願などとは願の性質が異なるものでありまして、別願とは稱するものの釋尊の一舉手一投足が悉く因位の時の誓願に依つて規定されて居る

釋尊の一代記に過ぎないのであります。

また藥師の十二願は「藥師如來本願經」に依れば、その特徴とするところは除病、息災、除患、脫苦等であつて、精神上のことよりも主として實際上の問題が取上げられて居るのであります。また「藥師如來本願功德經」には

「西方極樂世界に生ぜんと願じ、その心いまだ定まらざる者、若しこの如來の名號を聞かば、命終の時に八大菩薩ありて、空に乘じて來りてその道徑を示し、即ち彼の

國に生ずることを得せしめん」と云つて阿彌陀の淨土への東道役を承ることになつて居ります。

さて願つてかう云ふやうな諸佛別願の内容を眺めますと阿彌陀佛の別願である四十八願が極めて高いものであり且つ非常にすぐれて居るものであることがよく判ります。

阿彌陀佛の四十八願は非常に意義の深いものであります。一朝夕に説明は出来ませんが、善導大師は

四十八願莊嚴記（往生禮贊）——極樂淨土

四十八願酬因身（玄義分）——阿彌陀佛

一々誓願爲衆生（般舟梵）——廣度衆生

と云はれ、四十八通りの色々な願が立てられては居るけれ

ども、その四十八願の「一」はみな衆生の爲のものであつてその外の何ものでもない、その無量壽光の酬因身も莊嚴せられたる淨土も悉く衆生の爲の身であり土であつて、この衆生への大慈悲が四十八願の成就であり、阿彌陀佛であり、淨土でもあつて、心身土の三は渾然たる「一」であり、阿彌陀佛には自受用身と云ふものは全然ないのであります。即ち全他受用身であつて自ら味ひ自ら楽しむと云ふやうな自我的なものは少しも無いのであります。

聖道諸宗では報身の佛に自受用身と他受用身との二面があるとして居りますが、それではまだ本當に自我が抜け切れて居ないと申さねばなりません。ですからこの聖道門的立場から四十八願を分類すると次のやうな三種のものがあると考えられるのであります。支那の淨影大師の「無量壽經義疏」上巻に依りますと

一、攝法身願(第十二、十三、十七の三願)

阿彌陀佛自らが自らを完成せんとした願望

二、攝淨土願(第三十一、三十二の二願)

阿彌陀佛の世界たる淨土を建立し莊嚴せんとする願望

三、攝衆生願(その他の四十三願)

十方の衆生を攝取せんとする爲の願望として居ります。これは宛かも國家の構成を

主權、——國土、——國民

の三者を別々に見てその三者が寄り集つて國家を作つて居るものとする「機關說」に相當するものであります。これは日本以外の諸國の國體組織であつて、我が國體とは全くその性質を異にするものであります。我國の國體はこの三者が別物でなく渾然一體となつて居るのであり、謂ゆる君民一體の「天皇即國家、國家即天皇」であつて、君民、國の三は夫れく一分子として分けることの出来ない

膽力強化

小心恐怖症

新正矯
法呈進明說



◇小心恐怖症◇悲觀症◇羞恥癖◇内氣性◇よくびやう癖等に關する人々を恐れ、物事に大膽さなく、心配し、無闇に人を恐れ、物事に大膽さなく、目上の人を恐る等の人は早く其惡癖を直さなければいけません。試験場や他人との應對にあつて、大失敗を來す。目上の人を恐る等の人は早く其惡癖を直さなければいけません。試験場や他人との應對にあつて、大失敗を來す。目上の人を恐る等の人は早く其惡癖を直さなければいけません。試験場や他人との應對にあつて、大失敗を來す。

出来る新自宅矯正法が發表され、無代進呈す

申込所

東京市澁野川區西ヶ原町三四六

瑞穗社研究所

ものであります。

それは四十八願がそのまゝ阿彌陀佛であり、そのまゝ淨土であり、そのまゝ爲衆生であつて區別して考へることの出来ない「阿彌陀國體」と同じ性質のものであつて、むしろ阿彌陀佛國を現實の上に見ると我が國體になるのであります。

日本以外の何れの國も、かうした完全國體を作ることが出来なかつたやうに、阿彌陀佛以外の諸佛は何れもその淨土を阿彌陀佛國のやうな完全な國土體となし得なかつたのであります。

つまり完全な原理を把握して居ないのであります。

一、組織機關の作用Ⅱ機關態

一、全體の生きる力Ⅱ生命態

その差は人造人間と本當の肉體を有する人間との違ひであります。生きた本當の人間も組織機關を持つては居りませんけれども、作られたぎごちない人工の機關と違つて、肉體全體が渾然たる統一態なのであります。それと同じやうに大宇宙の全實相はその全的増上緣の緣起莊嚴の姿たる一大生命態であり、それを更に抽出集成した美的表現が法藏の本願であり、その本願成就が宗教上の佛と淨土とであ

ります。まだ開發されて居ない人の眼には天地間の森羅萬象は個々の相としてのみ見えるのでありまして、それを通してその奥の「綜合生命態」を見ることが出来ないのです。即ち有量の中に阿彌陀(無量)を見ることが出来ないものであります。信眼を得たものには一々の相(有量)の中に阿彌陀(無量)の恩寵を感得することが出来るのであります。それは十劫の昔、法藏菩薩が開顯して私達に示して呉れた賜物なのであります。

顯るべくしてあらはれ得ずに永い間「法性」が伏藏されて居たから私達も本當に生きられなかつたのですが、その「法藏」の姿を開顯して明るみへ出して下さつた時、それは個々別々のものではなくして、全體に流れる(法界等流)一大生命態であることがわかつたのであります。だから無量光でもあり無量壽でもあるのであります。そしてこれがわかれば私達もまた無量光の中に無量壽を體得し得られるのであります。然るに曠劫からの昧執がこびりついて居て個我を離れることが出来ませんから(出離の緣あることなしと善導大師も云つて居られます)何かのキツカケに依つて「轉識」させなければならぬので、さてこそ第十八願に「念佛往生」を規定して下さつたわけでありまして。往生

とは「捨此往彼蓮華化生」と古來から申して居りますが、手取早く言へば「轉識」することであり、大生命の中に入り込むことであります。

捨此一個在(之)から色々のきたない考へが出る(を)捨てる

こと

往彼大生命態の中に生きること

蓮華に汚れに染まぬ清き世界のこと

化生(けいじやう)の物的存在でない精神的な轉換即ち轉識のこと

しかも單なる理論でないことを示すものとして、五十三代の傳統と長載永劫の鍊成とを語つてその歴史性を示して居りますが、それは宛かも我國の「宏遠なる肇國、深厚なる養德」の歴史性に似て居るものであります。

またこの「念佛往生」の願は法語にある通り「平等の慈悲」に住した上に立つたものでありますから、人を嫌ふと云ふことはありません。利好も馬鹿も律義者も不良も有慾も無慾もすべて嫌はないのです。特に面白いのは「佛前佛

後の衆生をも選ばず」とありますことですが、之れは「具體的な覺醒の指導力なき時代でも」と云ふ意味であります。

畢竟「平等の大悲」が根柢となつて居るからであります。善導大師は觀無量壽經の「佛心とは大慈悲是なり」の文句

を「平等の慈悲を以て偏く一切(衆生)を攝す」と解釋して居られますが、それを法然上人はまた

一切の言葉、廣くして洩るゝ人なし

と言つて居られるのであります。

我が國では國民の凡てが陛下の「大御寶」であつて、馬鹿も利好も善人も惡人も一切合切「大和魂」の所有者であり誠忠なる者であつて凡て洩るゝことはありません。よく「滅私奉公」と云ふ言葉が使はれますが「私を滅しよ」とするならば「私」がある譯です。「私」が少しでもあるならばそれは米英思想であつて個人主義思想が若干残つて居るわけです。個人主義は因果思想を以て宗教よ道徳の指導理念として居りますが、それを更にもつと廣く横の關係をも入れた緣起思想に依て「我」の觀念を取り去るべきのみならず、更に進んでは本願思想に立脚して「凡入報土」の信に住するのが、本當の日本的思潮に立脚するものだと思ひます。

凡入報土とは「つまらぬやくざ者でも」「御民我れ」の自覺に立ち得ることでありまして、滅私奉公よりもつと積極的な覺醒力を持つのであります。また個人思想の上からは常に時代的な偉人を待望して居りますが、本當は國家

全體國民全體が聖化して行かなければならぬのであります。茲に淨土觀が重要になつて來るのであります。釋尊や孔子は二千五百年を教化して來ました。然し我が國は神武天皇即位からでも二千六百年間國民を教導したのであります。つまり現在でも我が國は印度や支那よりも百年早いのであり百年長いのであります。しかも釋尊や孔子は印度や支那には無くなつて我が國にのみ生きて居るのであります。更には有史以前のスメル文化盛んなりし時から數へたら非常に古いわけでありますが、今日と雖もまた既に世界の思想より百年は進んで居るのであります。

此の故に米英人が日本の今日の思想を理解し得るには少くとも百年の後でありませう。西洋は物質文明にこそ一時は進んだやうに見えましたが、それは皮相的なものでありまして東洋の眞の物質文明はそれよりも深みの點に於いて西洋文明の眞似られないものがあるのであります。況して精神の方面は全然比較になりません。西洋では（と云つても亞細亞の中の西亞地域のことですが）釋尊や孔子よりも五六百年から千年おくれて居ます。即ち豫言者時代からクリストを経てマホメットに至つて、不完全ながらも西洋から南洋へかけての宗教が成立したのであります。

日本の宗教たる我が淨土教の思想は、純粹に我が國體に

養はれたものであつて、これを理解するには餘程の宗教的教養を経なければ出來ないのであります。聖道諸宗に養はれた人であるならば恐らく尙ほ百年の教養を経なければ本當に理解することが出來ないでありませう。少くとも日本的なものは東洋的なものよりも更に百年ほど進歩して居るのであります。かうした精神的なものになると、米英等はいかゞしい駄目であります。今度の大東亞戰爭でスツカリ眞相が暴露されてしまつたやうに、世界中どこを探したつて日本ほど立派な國を見出し得ないのであります。

これ明らかに個人的偉人よりも國土的聖化の方がより大なる指導力をもつものであることを證明するものであります。これと同じやうに諸佛の願成就の理想實現國土の中でも、阿彌陀佛の淨土のやうな全分他受用即ちその身その土の全體を衆生の爲にとする絕對慈悲の姿はどこにも見當らないのであります。されば諸佛の中から彌陀を選び、十方淨土の中から西方淨土を選んだのは、この國土に至一性があるからであります。この意味に於いて三世の諸佛はみな未完成佛であり、阿彌陀佛國のみ完成體であることが明瞭に理解されるであります。阿彌陀國は畢竟諸佛の母國であり、諸佛は彌陀佛國に來生することに依つてのみ完成されるのであります。

編輯後記

◇可成り蒸し暑い日が続いて、いつもなら三伏の暑さといふところですが、有難いことには暑ければ暑い程、稻の生長も良好らしいね。なんて、まるで耕作の苦勞を知らなかつた都府の人までがいふやうになつてきました。

◇有難いことと申せば未だいくらもありませう。

◇列車に乗ると忙しい用のある人と温泉等へ遊びに行く人は一見して判りますが、近頃は遊山の人々が何んとなく肩身を狭くして遠慮してゐる様子に見えるのも嬉しいことの一つです。

◇昔なら享樂は個人の權利であつて、澤山享樂出来る人はそれだけ偉いものやうに思ふ入が多かつたのですから、これがなくなつただけ墮落が喰ひ止められたことになりませう。

◇一粒の米、一碗の湯茶をも無駄にしない感謝の生活も、第一次歐州大戦後の好景氣時分には一時成金がビールで足を洗つたとか云はれた位であり、成金といへば下司なものの不愉快なものの代名詞になつてゐたことを思へば、現代の有難みがよく判ります。

◇國家づつ人の顔も知らずにゐたのが都會人であり、他人のことには手一つ動かすのも嫌であり、甚しいのは他人に迷惑をかけても平氣でゐたのが、近頃の國組の働き振りをみては何うして以前はあんなであつたかおかし位です。助けられたり助けたり、やつとわが國の美風をとり戻した感じがします。

◇海外發展といふ言葉はすでに古いものになりました。ビルマ、ジャバ、アリニューシヤン等が普通の者に餘のない遠い所であつた時分に出来た言葉です。今では行つたりきたりする隣國士になつてしま

ひました。

◇しかし他方には將來もつと努力しなければならぬ點もあります。

◇わが國は大東亞共榮圈の指導的地位にあることは申すまでもありませんが、ただ指導する口でいふだけは簡單でも、その實際に實に容易ではありません。先づ第一に指導者らしくわれわれ自身を鍛錬しなくてはなりません。他國を指導するのも御國のためですから減私奉公の氣持に變りがありますまい。

◇吉田敏二郎先生は御敬慕ながらも尊敬されてゐます。今後とも相變らず御指導の程願ひます。

◇友松國壽氏から久し振りに玉稿を頂きました。いつもながら多忙を極めておいでの中を頂戴し深謝します。

◇會員各位の住所變更の際は「御」氣下さい。またその際は舊住所も必ず御明記下さい。(村瀬)

淨土 八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和七年七月十日印刷
昭和七年八月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝区芝公園十五番地

編輯兼發行人 眞野正顯

東京市芝区芝公園十五番地

印刷人 赤尾光雄

東京市芝区芝公園十五番地

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法政上人總發行

東京市芝区芝公園十五番地

電話 東京八二一八五番

「淨土」購讀規定

一 部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢

(送料共)

會費

腦の病・神經系統諸症・神經痛
腦溢血・鼻・耳の病・不眠症

綜合的優秀藥

光明丸

主治効能

腦神經系統諸病、神經病、腦神經衰弱、不眠症
てんかん、腦膜炎、ヒステリー、小麻痺（ヒラ）、兒麻痺（ヒラ）、腦
梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、
逆上、耳鳴、腦黃血、頭痛、鬱血、（肩首コリ）
神經性（耳病）、神經性（鼻病）、記憶力減退、
思考力減退、精力減退、健忘症、性的神經病一
切、神經性變屈症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂
鬱症、誇大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症
胃腸障害、便秘症、神經痛、ロイマチス、關節
炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

價 藥	
六日分貳圓	十日分參圓
廿日分五圓	卅日分七圓

全國有名藥
店、一流百
貨店ニアリ
品切ノ節ハ
直接本舖へ
御注文下サ
イ

試供藥と
説明書を
進呈

京都伏見いなり山

謹製頒藥元 願 成 開

關西代理店 大阪 合資會社丹平商會分店
關東代理店 東京 株式會社丹平商會支店

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十七年七月廿日印刷納本、昭和十七年八月一日發行

淨 土 第八卷 第八號

定價金十二錢（送料）
高價定額 金十三錢
外地定額 金十三錢